

日本女學讀本

卷二



K230.8

59

2

下田
523

下田歌子監修
帝國婦人協會編

日本女學讀本

東京株式會社明治書院

文部省圖書
新783
共4冊

1951. 文部省寄贈

日本女學讀本卷二目次

- 一 御姊妹の宮 坪内雄藏 一
- 二 親心 一六
- 三 愛 一九
- 四 湯淺元禎の母 下田歌子 二四
- 五 松の操韻文 税所敦子 二五
- 六 天長節祝日 松村任三 二七
- 七 秋の七草 飯島魁 三二
- 八 鳥の美

檢定
文部省圖書

目次

九、自然の音楽	坪内雄藏	三八
一〇、農家の春秋		四〇
一一、農人形		四八
一二、京都の秋	池邊義象	五三
一三、染物	下田歌子	五七
一四、染物註文依頼の文 同返事		六一
一五、裁縫	下田歌子	六三
一六、衣服と精神	大隈重信	六六
一七、流行		七〇
一八、歳末の十日		七三
一九、歳暮韻文	小出 繁	七八

二〇、年始の文 同返事		七九
二一、俚諺十則		八二
二二、旅順開城	櫻井忠温	八三
二三、飛行の話	岩本周平	九〇
二四、壯烈なる空中戦		九八
二五、北海道の冬	志賀重昂	一〇五
二六、憲法發布	落合直文	一〇八
二七、初度の歐洲行	福地源一郎	一一三
二八、太平洋韻文	大和田建樹	一二〇
二九、知らぬ友その一	杉谷代水	一二二
三〇、同	その二	同 一二八

三一、	石炭	一三三
三二、	玻璃の發明	坪内雄藏 一三八
三三、	母の感化	福澤諭吉 一四二
三四、	十錢銀貨の來歴談	坪内雄藏 一四八
三五、	廉潔と節儉	藤岡作太郎 一五七
三六、	雛祭の記	高濱虚子 一六〇
三七、	住居の清潔	一六四
三八、	行儀作法	徳富猪一郎 一六七

卷二目次終

日本女學讀本卷二

一、御姉妹の宮

常宮・周宮兩内親王殿下には、九重の雲深う生ひ立たせ給ひて、同じく高輪の御殿に住ませ給ひしが、御姉妹の御仲いと睦ましく、よそにて拜し奉るだに御羨ましきほどなりき。さるに、常宮殿下は、明治四十一年彌生の末つ方、竹田宮恆久王殿下に嫁がせ給ふこととなりぬ。この御殿にましますも、今宵一夜とい

暖昧

彌生



下殿王親内子昌宮常 下殿王親内子房宮周
(の中仕在御に殿御繪高)

ふ四月二十九日の
夕つ方夜の御食ま
ゐりて後御二方に
はくさくの御物
語せさせ給ひ御懷
かしさに堪へ給は
で互に御手を取り
かはしつゝうち泣
かせ給ふにぞ侍女
たちはこはめてた

整理

き御涙ぞと笑に紛らしつゝも御心を思ひやりまつ
りては座にも堪へ難うなりて袖もて顔を打ち掩ひ
ぬこの時佐々木高行侯夫妻立ち出で御慰めのこ
とも申し上げしにげにもと微笑ませ給ひつゝ常
宮殿下は御手もとの御用品などなにくれと御整理
せさせ給へば周宮殿下も傍よりかひくしく御手
傳せさせ給ひぬ

三十日の朝常宮殿下は近侍の人々等の御祝辭を
受けさせ給ひてそれく御手厚き御挨拶ありやが
て佐々木侯夫妻を始め同家の人々を特に御居間に

え上げず

召させられ御容を改め給ひて、年久しく一方ならぬ養育の恩を受けぬ。御身等の誠忠は、心に刻みて永く忘れざるべし。などのたまふに、何れも頭をえ上げず、涙に袂を絞りたりき。

今昔

殿下はそれより御殿の内外を見廻らせ給ふ。御手植の松をかゝい撫で給ひては、今昔の御感に堪へさせ給はず。なほ彼方此方を見をなはずほどに、御出門の時刻迫りぬ。御廣座敷に直らせ給ひ、女官等の御介添にて御正容に着かへさせ給ふ。さて周宮殿下に向はせられ、他に嫁ぎてよりは、何事も一つ宮居のやうに

たゝすみ

はなりがたくともしげく訪はせ給ひてよ。これよりも必ずしばく訪ひまゐらせん。さらば。どのたまへば、周宮殿下は、今日は一滴の御涙をも浮べ給はず返すく御慶を述べさせ給ひて、御玄關まで見送らせ給ふ。やがて御馬車の音はあしたのうらかななる空に響きてやうく遠くかすかになり行きぬ。周宮殿下はなほたゞすみ給ひて、そなたの空を眺め入らせ給ひしが、やゝありて、御言葉もなく御居間に入らせ給ひきとかや。

はらから

げに、はらからの情は、上も下も更にかはりあるべ

きならぬども、御姉妹の宮の御睦ましと漏れ承るだ
にいと有り難くこそ。(聖徳餘聞)

二 親ごころ

坪内雄藏

神戸から北海道へ向けて出帆した汽船某丸が、志
摩の沖あみを走つてゐる頃、甲板に集つた上中下の
乗客の中で、目に立つたは年四十一二の婦人、身分の
ある人の妻女らしく、甲板に出てゐる間も、老女と小
間使とがそばを離れぬ。金の指輪が、二つも三つも、左
右の手の指に光つてゐるといふので、其の身なりの

立派さを推察することが出来る。

それと照り合せて、一しほ見すばらしう見えたは、
七つ位を頭に、子供を三人までつれた、四十前後の男
子供等は、三人とも醜からぬ顔だちなれど、身なりは
甚だ粗末であつた。

思はく

婦人は、何か思はくがありげに、親子の者の様子を
餘所ながらながめてゐたが、何事か老女にさゝやい
た。いつともなく、老女は親子のそばへ來た。末の子が
わんぱくを言ふのをすかして、老女が菓子をくれた
のが縁となつて、互に口をきゝ始めた。

「お子供衆が澤山で、さぞお楽しみであらう。」と、老女がいへば、「どう致しまして、此處にゐまする外に、まだ乳呑子がひとり。貧乏人の子澤山とやら、子供故に苦しみまする。さりとて捨てるにも捨てられませぬゆゑ、飢死せぬ用心にと、親子夫婦六人づれて、根室へ出稼ぎに参ります。」と、問はず語り。

老女は、聲をひそめ、ちと立ち入つた事ながら、今のお話が眞實なら、承つて見たいことがござりますが、と言ひかけて、ためらへば、それはまたどの様なことを、と問ひ返され、老女が改めて語り出す話は、

ためらふ

男の子にま

老女が主人といふは、函館の豪商で、或大きな會社長をする人夫婦ともよろづに不自由のない身ながら、四十を越しても子がないのは玉に瑕、男の子にまれ、女の子にまれ、親知らずでくれる人はないかと、年來さがしてゐた矢先のこと。

「どうか御前様の子供衆の中のひとりを、親知らずで主人の方へ下さるまいか。行末は、その子が主人方の跡取、御禮としては金子百圓あげまする筈。何と承諾して下さるまいか。」と思ひがけぬ結構な話。男は大に悦び、すぐにも承諾しようかと思つたが、妻と相談

承諾

今、デ、ハ、
百圓、い、
人、金、シ、
リ、ウ、カ、

の上で、兎も角も御返事致しませう。とて、その時は別れた。

その日の夕方、汽船が相模灘を通つてゐる頃、彼の男は、妻らしい女と一しよに、七つになる長男をつれて、上等室を訪れて、何卒この小僧をお引き取り下されませ。と言ひ入れた。會社長の妻女は大悦びで、その子を受け取り、早速老女にいひつけて、用意の著物を著せるやら湯をつかはせるやら、騒ぎであつた。

貧乏人夫婦は、百圓といふ大金を貰ひ、飛びたつ様に悦んだものゝ、また親子一生の別れかと思ふと悲

今、上、留、官、に、
イ、ハ、カ、
マ、ア、不、明、

しくもあり、暫くはそこを立ちかねてゐた。

翌日、船が房總半島を回つてゐる頃、きのふの男は四歳になる次男をつれて、再び會社長の妻女を訪れた。さてきまりわるげに言ひ出すをきけば、昨晚、改めて考へました所、長男を餘所へあげまして、弟を残すは、何分にも順違ひゆゑ、どうも長男はあげられませぬ。成らう事なら次男と取りかへて下さりませ。といかにも言ひにくげに言ひ入れた。

會社長の妻女は、快く承諾して、長男と次男と引きかへた。

すると其の日の暮れ方、今度は母親が三つになるのをつれて訪れた。

「何とも申しかねましたなれど、さしあげました次男は、目鼻立ちから聲までが、なくなつた姑に生き寫し、それゆゑ現在の姑御を棄てる様な氣がして、どう考へても心が濟みませぬ。結句辨へあるだけに、大きい程ふびんがまさります。申しかねましたことなれど、此のぐわんぜんしと取り換へて下さりませ。」と淀み／＼言ひ入れた。

會社長の妻女は、親心を思ひやり、これをも快く承

ふびん
ぐわんぜん
し

諾した。

翌日の午前、船が函館灣に近づいた頃、例のが今度は夫婦連れて、し／＼と上等室へはいつて來た。會社長の妻女を見るや否や、跪き物をも云はずに泣いてゐる。

仔細を尋ねても、只「面目がござりませぬ」とばかりで泣いてゐる。幾たびも問はれて、やう／＼顔をあげ、「この様な自儘なことは、もはや申されぬ筈なれど」と、前向きして、夫婦がかはる／＼語るをきけば、

「昨日次男をいたゞいて歸つてからは、夫婦互に約

未練

束して、もうく、決して未練はいふまいときめましてなれど、夜一夜小さいの、事が氣にかゝつて、ぼつちりとも寝ませなんだ。あの様なくわんぜないものを、金子にかへて人様にあげるとは、我ながらむごい心と思ひました。いたゞいたお金はお返し申します。どうぞ娘をばお戻しなされて下され。こんな思をするよりは、親子六人揃つて飢死した方が、ましてござります。粗忽をお免しなされて、娘をば戻して下さりませ。と、夫婦かはるく、涙ながらに頼んだ。これを聞いて、會社長の妻女はつくづく感じ入つ

粗忽

た。他人から見ればこそ、自儘身勝手とも思はるれ、子を思ふ親心は、げにさうもあらうかと思ひやりの深い婦人ゆゑ、快く承諾して女の子を返し、その上戻した金子すらも、皆請け取らず、親子が行末の暮しの助にと、その中幾らかを分けてやつた。

夫婦は夢かと喜び、手を合せて會社長の妻女を拜む時、船は函館の港に著いた。

資本が出来たゆゑ、夫婦は根室へ行くまでもなく、函館にとゞまることゝなり、やがて或會社へ雇はれた。それも會社長の妻女が世話とのはなし。

舐犢の愛

三、愛

要素

燒野の雉、夜の鶴、さては乳虎の怒、舐犢の愛、子を思ふ情は禽獸にも具れり。旅雁の空に叫ぶも、牧羊の野に呼ばふも、友を呼ぶ親愛の聲にあらざるは無く、やがては外敵に對する警告にてもあるべし。げに愛は團體の結合力にして、道德の主なる要素たるなり。愛は己をおもふ情を推して、他に及すに外ならず。己の苦を除かんとする心を擴めて、人の苦を除かんとし、己の樂を得んとする心を擴めて人に樂を得し

慰藉

百世の儀表

めんとする同情の心なり。此の同情の心は親に對しては孝となり、子に對しては慈となり、夫婦の間にては和となり、兄弟の間にては友となる。一般尊長に對して、愛敬し景慕するの心も、亦其の發現といふべし。更に之を擴めては愛郷心となり、愛國心となり、社會公衆に對する愛となる。慈善・仁惠・哀憐等、皆愛の種類にして、宥恕・愛撫・慰藉等、愛の發動にあらざるはなし。一代を師導して百世の儀表となれる偉人は、皆博く愛を宣傳して、人類の幸福を進めんとしたるものなり。孔子・釋迦・基督の如きは皆然り。我が國御歷代の

社交

御仁慈は申すも畏し。各國代々の宗教家・教育家・道德家の事業も、究極する所亦一に歸す。愛は萬物を生育する太陽の光に比すべく、愛ありて始めて人生の妙味あり。社會の平和を得るも、國家の安寧を保つも、愛の結合に賴れり。愛なくば何處にか社交の愉快あらん、何處にか家庭の和樂あらん。愛の情は此の如く貴く、愛の力は此の如く大なり。然れども、若し自然の發動に任せんか、此の貴ぶべき情も、却つて恐るべき弊害を醸すことあり。又博く他人を愛せんとして、却つて其の親しきものを顧みざ

鞏固なる意志
節制

るが如きは、宜しきに適へりと謂ふべからず。愛情は常に明確なる智力と鞏固なる意志とを以て節制を加へざるべからず。愛情は養ふべく、愛情には溺るべからず。西洋の諺に曰く、「愛は盲目なり」と。(高等小學讀本)

四、湯淺元禎の母

下田歌子

備前國岡山の藩士瀧陳良の女瑠璃子は幼少の頃から才智優れて、且記憶力に富んで居た。齡二十八歳の時、同藩の湯淺英と云ふ人に嫁して、程無く一子元禎を生んだ。其の當時、夫の英は目付職であつたから、

目付職

少し足らぬ

元種、英
幾載
子イリヤ

早婚の弊

度々江戸へ出張して留守がちであつたが、瑠璃子は能く家を守つて内政を整へ、又子息の教育に深く心を盡した。兎角する間に、英も老年に及び、且病に罹つたので、職を辭して國に還つたが、それからひたと病牀に打ち臥して、六年の長き歲月を経た。その間も瑠璃子は、毎夜傍を離れず、手に手を盡したが、遂にかひなく歸らぬ人となつたので、其の後はずく「一子の教育を、一意専心に勉めて居たが、瑠璃子は夙く早婚の弊を認めて居たものと見えて、元種には容易に妻帯を勧めず、自ら家事一切より子息の世話まで、一

岐路

恩威緩急

身に引き受けてした。とりとて、能く母の威嚴を有つて、聊も我が子をして禮を缺かしめるが如きことを爲さしめず、其の然る可らずと思ふことがあれば、懇に戒めて、決して岐路に逸せしめなかつた。常に人に語つては、凡そ子を教へるには、恩威緩急の度を過らぬ事が肝要である。其の不可なる點においては、遠慮なく叱り懲すべきも、其の可なるところは、又随分に賞讃して遣さねばならぬ。殊に文武の兩道を勵まし勉めしむると同時に、又一方には慰めもし、休ませもしなければならぬ。といはれたとの事である。

饗應

瑠璃子は子の元禎が家に在る時は、或は古人の傳記、歴史等に就いての物語をしたり、或は歌を詠み、琴を弾いて其の心を樂しましめたり、又は飲食物を調理して饗應などもしたから、元禎は母と共に、其の家庭にあることを、此の上も無い満足として居た。又、瑠璃子は元禎が外から歸つて來た時は、殊に機嫌よくして、子息が出先であつた事の咄を聞くのを何より樂にして居たので、元禎もまた何事をも包まず母に咄した。瑠璃子はこれを能く聞いて置いて、しても善いと思ふことは、勧めて行はせ、往つても善いと思ふ

益友

損友

所へは勧めて遣り、若し不可と思ふ時は、より／＼に戒めて止めさせてしまふやうにした。そして又、元禎の友達の來ることがあつても、其が益友だと思へば、瑠璃子は非常に機嫌よくもてなすけれども、損友だと思ふ時は不機嫌であつて、愛想もしなかつたから、元禎は次第に損友に遠ざかつて、益友に親しむやうになつた。

一體年頃の男子は、其の家庭において、母親と共に在る事を好むやうなれば、決して不品行に身を持ち崩すが如き事はないもので、大抵は家庭の不平・無趣

刀自

味を感じるところから、遂に青年男兒をして、曲つた道を歩くやうな事に傾かしめる場合が多いのである。是を思へば、瑠璃子刀自の如きは、賢母の鑑慈母の手本といつても宜しいのである。

五、松の操

税所敦子

月の桂

月のかつらも　　たをるべし。
言葉の花も　　かざすべし。
月の桂は　　手折るとも、
ことばの花は　　かざすとも、

しぐれに染まず、

降りつもる

雪にたわまぬ

常磐木の、

松の操を

まもらずば、

世に立つかひや

なからまし。

六、天長節祝日

八月三十一日は、めでたき天長節なり。されど此の日は宮中の御都合上、御宴を見合せられ、十月三十一日を以て祝日と定められたり。當日各學校にては、嚴肅なる奉祝式を挙げ、國民は此の佳節を迎へて、北は

權太朝鮮より南は臺灣・南洋のはてまでも國旗の靡かぬ處なきぞめてたき。

かけまくも畏けれども天皇陛下は明治十二年御降誕ましくて、同二十二年十一月三日皇太子に立たせられ、同大正元四十五年七月三十日踐祚あらせられたり。東宮の御時より岐嶷夙成、文學軍事などは申すに及ばず、深く民間の事情にも通じ給へり。大統を繼がせ給ふに及び、祖宗の舊章に率由し、先帝の遺圖を恢弘して、内文教を治め、外武徳を輝かし、給へる大稜威は、洵に先皇の英風を仰ぎ奉ること、ちしていと尊

岐嶷夙成

大統

遺圖

しとも尊し。

我等大正の大御代に生れあひて、皇恩に沐浴する者、常に陛下が人民を赤子視して、愛撫存養し給ふ大御心を體して、孜々勤勉、學を修め、業を習ひ、忠誠以て皇恩に奉答せざるべからず、此の心もて、今日の佳節を祝ひ奉るべきにこそ。

沐浴
愛撫
存養

孜々

七、秋の七草

松村 任三

萬葉集に、山上憶良が秋の野の花を詠める歌あり。
秋の野に咲きたる花をおよび折り

かきかぞふれば七種の花
萩が花尾花葛花瞿麥の花

女郎花また藤袴朝顔の花

春は草木の芽ざすとゝもに、さまざまの花咲き出づ。
殊に四月初よりは、限なき百千の花の開くあり散る
あり。人は胡蝶と共に、かれを賞しこれを惜みて、殆ど
應接に遑なき有様なり。夏としなれば、さしも賑しか
りし花は散りて跡なく、目のふるゝ所野も山もたゞ
一樣の緑となり、炎熱漸く烈しきにつれて、人はたゞ
雨を待ち風を迎へて、僅に晩涼に蘇る思をなすのみ。

應接に遑な
し

野趣

かくて、秋風一夜西より來れば、果實は成熟して自然
の美味をそなへ、食用に堪へざる木の實も亦美しき
色を呈して、野趣を添ふるものなり。殊に、野山には、黄
白・紫・紅・種
々の美し
き草花ど
も咲き亂
れて、露に
たわめる
あり、風に



秋の七草

優美
濃艶

靡くあり。人はふたゝび風月に親しむに至るげに、秋の千草の花の優美なるは、春花の濃艶なるにも劣らざるべし。

雅致

中にも、この七種の花の如きは、わが國の固有の草花にして、殊に雅致多きものを挙げたるなれば、これによりて本邦に産する植物の品格を知るべく、又、日本の秋氣のいかに清爽にして人に適するかを知るに足るべし。尙、美術に於ても、繪畫に蒔繪に、これらの花を描きて、その幽韻を愛すること常なれば、以て日本人の風流心をも見るに足るべし。外國には、このう

幽韻

ち、無きものあり、又、有りてもこれを賞することの我が國人の如く深からざるものあり。普通植物

八、鳥の美

飯 島 魁

風致

風致といふものは、單に山の形、水の姿、それに美しい色彩の美を與へて居る植物ばかりで組成せられて居るのでは無い。山光水態いかに美しく、草花樹葉いかに麗しくとも、其の間に動く何物か、無ければならぬ。それは即ち動物である。昔から花鳥といふ。文學・繪畫・彫刻・音樂等、あらゆる藝術には、花と鳥とが重

山光水態

題材

貧弱

單調

あしらふ

要な題材とせられて居る。殊に吾が邦の繪畫や詩歌には、花と鳥とが主要な地位を占めて居て、其の中から花鳥を除き去つたら、非常に貧弱なものとなつてしまふ。

わが宿の池の藤波咲きにけり

山ほとゝぎすいつか來鳴かん

といふ通り、花だけ鳥だけでは單調である。花に鳥をあしらひ、鳥に花を結びつけて、始めて複雑な美が成立する。梅に鶯、卯花に杜鵑、蘆の花に雁といふ風に、四季それづゝの花には鳥が附屬物となつて居る。梅に

色調
線條

動的
靜的

乾燥

大袈裟

鶯、竹に雀ときまつてしまへば面白くはないが、花と鳥とで色調が整へられ、線條に變化が出來、こゝに始めて動的・靜的兩面の美が成立するのである。

音に鳥のみならず、あらゆる動物は皆かく風致に美を加へて居る。禽獸蟲魚は昔からの畫題であり、詩材である。春日野から鹿を奪ひ、武藏野から蟲を除いたならば、其の春の旦、秋の夕の景色は、どれだけ乾燥なものとなるであらう。其等美觀上の價值あるもの、大袈裟にいへば、人生の存在に價值のあるものを、人間が自由に捕殺する權利を持つて居るだらうか。分

影響

り易くいへば、狩獵税を出しとへすれば、それで勝手に鳥獸を殺してもよいものか。どうか。一年、二年では其等狩獵の結果は現れて來ないが、五年の後、十年の後、如何。百年とまではいへぬ、五十年の後にはどんな影響を此等の生物に及すであらうか。實に恐るべきものが有るであらうと思ふ。事によると、二十年、三十年の後には、吾々の見た古い木も美しい鳥も姿を隠して、吾々の子孫はそれを眺める事が出來なくなり、はすまいか。鶯の笠に縫ふてふ梅の花」とある。鶯はどんな鳥であらうといふやうな事に成るかも知れ

誇大

ぬ。吾々は吾々の見た鳥や獸を、やはり子孫に遺して、子孫にも楽しませてやりたく思ふ。

「鳥類全滅の虞あり。」かくいふと、人或は誇大の言をなす者といふであらう。けれども誇大でも何でもない。日本の鳥類は今將に全滅せんとしつゝあるのである。去年と今年とを比べて、其の間の差異を發見することは困難である。併し今日を十年前、二十年前と比べて見ても、其の間に非常な差異のあることを感知するであらう。此の過去の變化を以て將來を推せば、十年後、二十年後にどういふ現象を呈するかは、今

現象

觀察

桃花鳥色

から豫め想像することが出来る。廣い世界の目から觀れば、滅亡した動物は無數である。狭い日本で觀察しても、既に歴史的に成つたものがいくらかも有る。諸子は美しい桃花鳥色の色彩を知つて居るであらう。併し今は桃花鳥色こそあれ、其の色に此の名を負はせた朱鷺といふ鳥は居ない。桃花鳥色とは其の色が朱鷺の羽色に似て居るから附けられた名であるが、此の鳥は最早全滅して姿を見ることが出来ない。蘆田鶴の千代呼ばふといはれた江戸の千代田城には勿論、江戸附近には多く鶴が居たものであるの

本所 五五 羅漢
八目星 鶴 鶴 鶴

思案投首

に維新後は其の影をだに見ることが出来なくなつた。鶴も昔は澤山居た。淺草の觀音さまへ行く子供は、皆鶴が見られるといつて喜んだものだ。築地淺草の兩本願寺本所の五百羅漢の屋根の上にも、うよくする程澤山鶴が居たが、今は早全國一般に居なくなつた。鷺の滅つたことも夥しいもので、昔は到る所の水田に水鏡を映して、思案投首の白鷺を見ることが出来たが、今では御獵場以外に多く見ることは出来ない。これはほんの二三の例である。其の他あらゆる鳥類は、日本から姿を隠さうとして居るのである。風

ゆゝしい

致の上から觀て、ゆゝしい一大問題ではあるまいか。

九 自然の音樂

坪内雄藏

聲の調子に一定の高低ありて、節面白く鳴り響くを音樂といふ。琴・笛・三味線・ピアノ・オルガン・唱歌などの音曲は、通例いふ所の音樂なり。

しらべ

されど、かゝる人爲の音樂の外に、自然の音樂ともいふべきものあり。鶯・雲雀・松蟲の聲などこれなり。其の他、心を留めて萬物の聲を聞けば、松風にも、水の聲にも、自然に美しきしらべはあるなり。雞も歌ひ、鳥も

鳴く。雀・雲雀・山雀など、百鳥の聲皆音樂なり。鶯の高き天に歌ひ、鳩の低き梢に鳴く、これもまた音樂なり。ある鳥の音は笛の如く、ある鳥の音は琴の如く、またある鳥の音は胡弓の如し。

音色

ひぐらしの聲に夕日沈めば、松蟲・鈴蟲・機織こぼろぎなど鳴き出づ。或は金の板を叩くが如く、或は銀の鈴を振るが如し。蛙・蟬・蜂など、皆それぐに樂を奏す。草を吹く風、樹を吹く風、空高く吹く風など、風も各その音色を異にす。或は琴の如く、或は笙の如く、或は箏の如し。

水の音楽は更に面白し。泉の水の湧き出づる音は、
琴・尺八・ピアノの曲とも聞くべく、落葉をくゞる細き
流の聲は、琵琶・月琴の調にも似たり。軒の雨垂を豆太
鼓の音に喩へんか、瀑布のどろろと落つるは、大太
鼓の響にも喩ふべからん。たゞ彼の大海の波の音の、
ものすごく勇しきに至りては、また譬ふべきものな
し。

一〇、農家の春秋

毛附
毛上

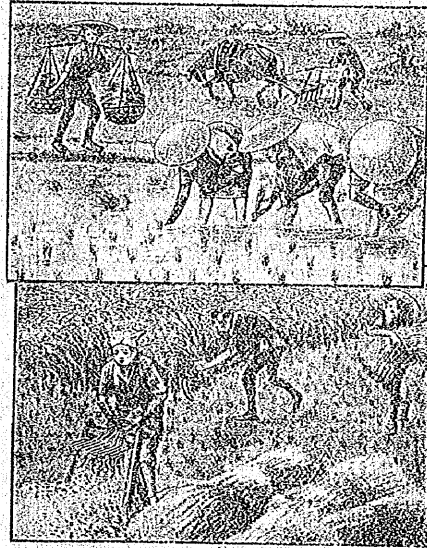
毛附・毛上と云つて、農家の特に忙しい時が春と秋

とに二度ある。春は麥を刈り取つて田を作る準備、秋
は稻を取り入れて麥を蒔くこしらへ。此の兩度の時
季が農家の骨折時である。

梅雨
夏至

六月に入るとだんく暑くなる。ねむさうな聲で
蟬が鳴き始める。苗代の苗が延びる。麥の穂が赤らむ。
彼是するうち梅雨になるから、それ迄に麥を取り入
れなければ腐らせてしまふ。二十~~六~~二日は夏至で、其
の前後一週間程のうちに、田植もしなければならぬ。
夜は短くなる。蚊が出て来る。農家の此の時分の忙し
さ。雨上りには麥畠がまだじくじくして居る。併し季

眞畫



節は待つてくれないから、小さい笠を被つて刈り始める。雨上りの土が草鞋に附く。足は重い。鎌が切れなくなる。疲れに疲れて、眞晝には眼も眩む位である。都會の人はからころと下駄ばかりで、團扇片手に暑くなつたと言つて居る頃である。麥はやうく刈り入れた。一家の田地何町歩あつて

も、此の一週間のうちに田植をしまはねばならぬ。そこにも、此處にも勇しい田植歌が聞える。明治天皇の御製に、

大ねた外や後
燕飛ぶ影のみ見えて田植時

家に人無き小山田の里
かみあふ不明

一村かくの如く賑つて、二十五、六日頃には一面の青田。青葉の山も晝のやうに映つて居る。これでまづ一安心と、二三日打ち通しての毛附休。餅も搗き、御馳走もする。都會の人は狭く、しい家の内で、電車の軋る音を聞いて、馬車馬や自動車の塵を吸つて居るの

軋る

である。

小山田の霧の中道ふみ分けて

人來と見しは案山子なりけり

風が吹いても、雨が降つても、案山子は田の中に立ち盡して居る。ふと見れば眞の農夫が立つて居るやうで、驚くものは鳥獸ばかりでない。

農夫は實に案山子其の者である。粗衣粗食で、年が年中田畑に出て、稼穡の爲に忙殺せられて居る。二百十日頃の心配は一通りでない。此の頃はちやうど中稻が穂を出す時分で、大風が一度吹かうものなら、そ

稼穡
忙殺

上御一人

民草

れこそ夏中の辛苦艱難も皆無になつてしまふのである。我が國は古來農の國である。心配するのは農夫ばかりで無い。恐多くも明治天皇におかせられても、
○照るにつけ曇るにつけて思ふかな
我が民草の上はいかにと
と御心配遊ばされたのである。

此の恐ろしい二百十日・二百二十日の厄日が過ぎると、やがて天氣も固まつて、九・十・十一と三箇月は、秋晴玉の如き小春日和となる。稻は此の間に早稻・中稻・晚稻と順々に實のつて行く。

小春日和

鋤く

取入が始ると、こゝに又農家第二回の多忙な時節となる。日は一日々々短くなる。早く取り入れて又麥を蒔かねばならぬ。其の忙しさは、田植時分の比ではない。田植の仕事は、何といつても水仕事である。田を鋤いて水を入れ、これに稻の苗を植ゑるのである。稻は水生植物であるから、少々雨が降つても、風が吹いても、田植が出来る。まして時候が時候だから、水田の仕事は却つて心地がよい位である。

夜を日に繼ぐ

然るに稻刈の時は、刈つた稻を濡してはならぬ。雨の降らないうちと、夜を日に繼いで鋤く。つらいのは

有明の月

發矢

山際

麥蒔で、十一月下旬から、十二月上旬にかけて蒔く。日が短いから、半分は夜業である。夜は十時・十一時頃まで野で働き、朝は又四時頃から起きて行く。やつと暖くなつた寢屋を捨て、眼を擦りく、出て行く。鎌のやうな有明の月が西の空に懸つて居る。まだ夜が明けない。鍬で土くれを撃つと、又が小石に中つて發矢と火花が出ることもある。遠近に牛のうなり、馬の嘶が聞える。人聲もする。こゝもかしこも麥蒔である。六時頃日が出る。山際の雲が晴れて、東の空がうす明るくなつた頃の冷たさ。地の凍るのも此の時分だ。

焚火

夢路をたど

容易

ある。堪へ兼ねて遠近に焚火するのも見える。思ふに、農家一年の中、此の季節ほど心せはしく、且苦しい時はあるまい。都の人々は未だあたゝかい夢路をたどつて、電車も通らなければ、牛乳配達の手も通らぬ時分、田舎は人々皆目ざめて働いてゐるのである。我等が毎日口に入れる米や麥、只の一粒も容易に出来たものではない。安子國文

一一、農人形

水戸の常磐公園は日本三公園の一と稱せらる。そ

雙眸

素焼



農人形

の小高き丘陵に立つ時は、仙波沼を隔て、一帯の郊野を雙眸の中に收むることを得べし。園は徳川齊昭の創設せし所、名づけて偕樂園といふ。蓋し民と偕に樂しむの義に取れり。されば四時常に士民の來り遊ぶに任せ、花晨月夕、自由にその歡樂を竭さしめきといふ。こゝに素焼の人形を鬻ぐ。結髪、の老農、笠をその前に置きて、積藁の側に坐せるものなり。製法極めて巖なりと雖も、頗る雅致に富めり。世人呼んで之を「烈公の農人形」といふ。

初穂

齊昭居常深く心を農事に用ひ、屢園中の好文亭に登臨して親しく稼穡の勞苦を察す。嘗て銅にて農人形を鑄しめ、常に之を座右に置けり。その食膳に向ふや、必ず先づ初穂の意を以て一簞の飯粒を之に供へ、然る後に食するを例とす。

或時齊昭は、

朝なく飯食ふごとに忘れじな

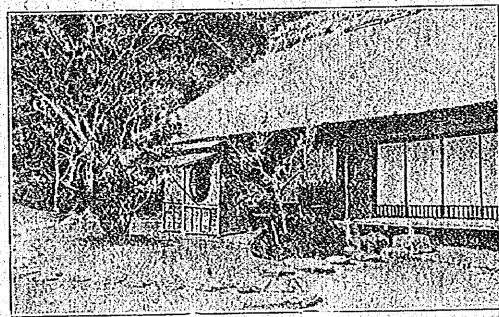
恵まぬ民に恵まるゝ身を

曰へらく

といふ一首の和歌を侍臣に與へて曰へらく、「古より賢君は民を見ること、なほ慈母の赤子に於けるが如

爾來

しといへり。されど、余は百姓をばわが乳母なりと思ふ。余は百姓に對して何等の惠を施さざれど、百姓はわが爲に命を繋ぐべきものを與ふ。その恩は乳母と異なることなし」と。爾來侍臣等は、此の農人形を呼びて御百姓といふに至れりとぞ。今鬻ぐところの農人形は、蓋し之を模造せるなり。前賢の意を勸農に用ひしや、寔に深しといふべし。



莊山四

心字の池

齊昭の祖先なる徳川光圀も亦嘗て隱棲の地を西山といふ處に擇びぬ。光圀は暇ある毎に農民を茲に引見して農事を談ぜりといふ。庵を西山莊と稱し、池を心字の池といふ。池を隔て、谷あり、山あり。春秋の觀賞兩つながら好し。名づけて櫻が谷、觀月山といふ。室は廣さ十數人を容るゝに過ぎず。殊に書院との間に全くその閼を撤せるは、貴賤の別を離れて親しく農民と談話を交へんとする意に出づと聞く。齊昭の精神は多く光圀より得來る。その意を農事に用ふるも、亦前後相承けたりといふべし。(田園都市)

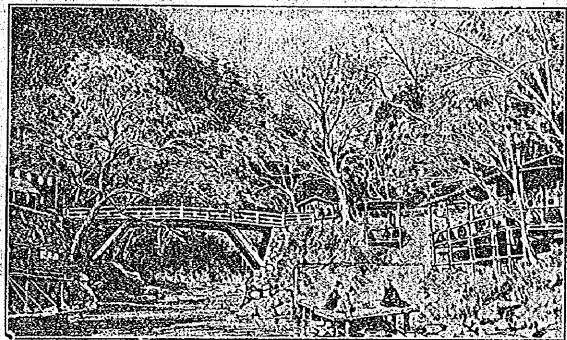
一二、京都の秋

池邊義象

霧のまがき
友禪染
西陣織

東京の春色の他に勝れるがごとく、京都の秋景は、また世に比類なきところなり。鴨川の水いよく澄みて、比叡山・如意が嶽・華頂・稻荷の諸峯に立ちつゝ、霧のまがきより、なにがしの樓門、くれがしの堂塔など見えがくれするさまはいかでこゝならでは求め得べき。

秋もやうく深くなりゆけば、高尾の紅葉は友禪染の幕を張りたるが如く、小倉山の紅葉は西陣織の



高尾の紅葉

帷を垂れしかとも見らるべし。眞如堂・永觀堂若王子の思ひく／＼に紅葉せるも飽くこと知らぬ眺にして、清水の紅葉は新高尾の名さへ負ひたり。東福寺・通天橋の紅葉は、維新の後、大木は伐られたりと、いへども、なほ世に得がたき景色なり。

空のいよく澄める夕、東山より上れる月の水晶

清涼殿
御溝水

蟲選

忍びやる

のごとくなるが、舊御所を照して、清涼殿の御溝水にその影を宿せるは、何となく昔の御事さへおもひ汲まるゝぞかし。雁の文字かきて鳴きつれゆく、西なるは大澤の池などにや宿るらんと思はれ、東なるは山を越えて堅田あたりにや落つらんとぞおぼゆる。嗟、峨野の蟲に大宮人の蟲選を思ひ合するも面白く、松吹く風に片折戸の琴の調など忍びやるも、あはれに優なり。

かくの如く、天地の美をあつめたるこの時、都人のおしなべて競ひする遊は、背狩なり。さるは、四方の山

山、心のむかはん方に、相知れる友どちらち連れ、割籠・瓢など携へ行きて、その茸の生ふる處を、廣く占めて狩場とし、よきあたりに幕を張り、自ら採れる茸を、こゝにて煮焼して食べあひ、楽しく一日を遊び暮すなりけり。

常は狭き小屋にかゝまり居るものも、この日は天地をわが家とせしやうなる心地して、何の憚るところもなくして遊びうかるゝさまは、東京の花見にもまさりつべし。

名所舊蹟に杖を曳くも、秋は殊に興を添ふるもの

にして、稻の黄ばみ、柿の實の赤くなれるなど、思ひすて難き景色なり。夜に入りて枕につくに、比叡山おろし物寂しく、鴨川千鳥の聲幽かなるなど、いかで昔の事どもゝ忍び出でざらん。京都の秋の趣味多きは、嘗に山紫水明の勝のみの故にはあらざるなり。

一三、染物

下田歌子

簡單

染物は、我が國では太古から既に開けて居たやうであるが、其の時代は無論染色と云うても、實に簡單なもので、草木の實や皮を取つて、それを煮出した汁

花摺衣
しのぶもち
すり

で染めたり、又單に草木の花を摘んで摺りつけるのであつた。これが歌などに詠んである花摺衣など、云ふので、しのぶもちすりも亦、この類である。其の當時は、染色も機織紡績の業と同じ様に、専ら女子の仕事として居たやうであるが、漸々この業の進むに従つて、却つて重に男がするやうになつたかと思はれる。すなはち文武天皇の朝に至つては、大藏省中に織部司を置き、機織及び染物を掌らしめて、染業を奨励せしめられた。かくて奈良朝時代に及んでは、纈纈などいふ染物も出來、桓武天皇の御世の頃には美術が

織部司
纈纈

盛であつたから、いろ／＼の染色も新に出来るやうになつた。

沿革
趨勢

其の後戰亂の世になつて、一時染物の業も衰へたが、徳川氏に至つて、再び長い間、泰平が續いたので、諸種の衣服に華美を競ふと同時に、染色の業も非常に進歩した。けれども、長足の進歩は維新以降のことである。これは人造色素の發明によつて、この道の著しく進んだ泰西の染色法を學び傳へたからである。すべて何の業でも、其の沿革進歩の東西ともに大抵同じやうな趨勢を見るのは、實に面白い事である。即ち、

制度

日本では往昔深紫・深紅の染色法が渡來した頃は、日本固有の物にも見るべきものもあるが、著しい進歩は、三韓と交通が開けてから織物・縫物・繪畫のわざと共に、染色の業も材料も、支那及び朝鮮から渡つたものが多いのである。非常にこれを貴んで、深紫・深紅は公卿以上の官服に用ひるなど、いふ制度があつて、濫にそれを着用することを許されなかつたのであるが、泰西でも、オウガスタス帝の時代には、チリアン紫染の羊毛絲は、一ポンドの時價が英貨三十六ポンドの高價であつて、高位高官の人で無ければ用ひる

嚴罰

ことを許されず、若しそれを竊に用ひる者があれば、嚴罰に處せられたとの事である。

今の有様で往つたならば、數年の後には、染色の業はいか程にまで進むか、殆ど測り知られぬであらう。

一四、染物依頼の文

昨日の長座と邪魔すゝたもの、砌に懇切な修業をせよ
糸が染物の件は、よくよく話して急ぎやうぞら曾
所前編け分る事一の折あては、乃お二編に達りの程席ハ
より巨細論文書お読め、徳女をきく下も、模範を必だえん

夢をみるにふりては、まじき夢を極うばひて、苦し
 かな、いふの趣、まじき方、餘程、其用意、匠、長、く、人の
 心、を、事、お、く、御、さ、さ、し、て、い、う、れ、だ、も、い、ふ、教
 育、の、心、は、皆、と、又、ま、ま、と、や、お、り、御、教、の、心、

十一月

同返事

其、い、う、ゆ、も、後、悔、い、の、事、も、ま、ま、と、漆、物、屋、の、心、ま、ま、と、
 其、地、上、漆、物、屋、の、心、ま、ま、と、漆、物、屋、の、心、ま、ま、と、
 其、心、ま、ま、と、漆、物、屋、の、心、ま、ま、と、漆、物、屋、の、心、ま、ま、と、
 其、心、ま、ま、と、漆、物、屋、の、心、ま、ま、と、漆、物、屋、の、心、ま、ま、と、

い、う、ゆ、も、後、悔、い、の、事、も、ま、ま、と、漆、物、屋、の、心、ま、ま、と、

漆、物、屋、の、心、ま、ま、と、漆、物、屋、の、心、ま、ま、と、

十一月

し、こ

一五 裁 縫

下 田 歌 子

從來

裁縫は從來女子の手工中、最も大切なものとして、
 第一に學ばしめたものである。然るに何時の世より
 か、仕立屋といふものが出来て、始め、装束師といふ者
 があつて、男子の官服を製するを職業としたのに習
 うて出来たのであるといふ事で、これが盛になつた

見え

沙汰の限

のは徳川時代であるといふ。専ら男子が従事するやうになつて、遂には、女子自身の衣服の裁縫さへも、この男子の仕立屋に任せることとなり、都會の地などでは、寧ろそれを見えのやうに心得てゐるに至つては、沙汰の限である。

天職

一體都會の女子は、上流富貴の家のものでなくても、料理は料理屋に注文し、洗濯は洗濯屋に託し、其の上自身の衣類の裁縫まで仕立屋に任せる輩も少くないといふ事であるが、斯くして、女子がその天職の大半を他に譲與して、これに代るべき事業がどれ程

女余
ト余フ

代名詞
ツ使フ

不問

耕耘

出來たであらうか。余は不幸にして未だそれを聞くことを得ないのである。地方の農家の婦女は、常に男子を助けて、外に耕耘に従事しながらも、なほ且内に能く機織紡績・薪水・裁縫の事をみづからするのである。これによつて之を見れば、都會の女子は、何等か他の専門の職業に従事するがために暇の無い人を除くの外、家人の衣服を裁縫する程の餘力の無い道理は無い。日本の衣服は西洋の衣服のやうに決して仕立屋に依頼する必要は無いのである。何となれば、其の裁縫の容易なると同時に、又これを解き更ふること

頻繁

とが頻繁でなければならぬからである。であるから、寧ろ銘々に裁縫する方が便宜で且經濟である。

一六 衣服と精神

大隈重信

衣服はもと寒暑に對して身體を保護するがために作られたるものなり。然るに時を経るに従ひて、衣服は更に他の目的にも用ひらるゝに至れり。中にも、衣服が一種の裝飾の具とせられて、男女老幼によりて、その色合・縞柄などを異にし、流行を追ひて、互に其の美を競ふは、誰もよく知るところなるべし。されど

裝飾

も、其の最も著しきは、衣服が人の精神をあらはす手段となり、これとゝもに、交際上に必要なる禮儀の用具となれることなり。

人の生活には、喜あり、悲あり、家居平常のゆるやかなる時あり、儀式應對などにて改る時あり。これに應じて、衣服にも、常服・晴衣・禮服など、様々のもの出て來れり。家に居てくつろげる時は、不斷著のまゝなるが氣樂にて且相應せり。これに反して、訪問の客に接し、或は他人の家を訪ふ時は、著流しのまゝにては、取り締りなく且禮を失ふことあり。特に嚴めしき儀式の

訪問

場所などに臨むには、羽織・紋付など相應にして、これがため心も自ら引き締り、獨その人のみならず、これに對する人の調子も、自然に改るべし。

かくの如く、衣服は場所によりて、それぐの變りあるのみならず、人の身分・年齢に應じても異なり。されど、世間には、その身分・年齢に副はざる服裝をなせる者少からざるが如し。身の程を忘れて、華美なるあり。年にも恥ぢず派手なるあり。此等はいづれも品下りて、心のほども見ゆるやうなり。品格は衣服の品質によるにあらずして、木綿にても正しくば差支なし。

品格

ゆかし

皺のよれる絹物よりも、折目正しき木綿物を著たる方、ゆかしきものなり。されば、婦人自らは勿論、その世話する男子の衣服までも、よく見あはせて、場合に應じて相當なる風をなさしむるやう心掛け、晴衣はもとより、不斷著まで、毎夜疊み置きて、毎時も折目正しくなしおくべし。又、不斷の物は、しばく洗濯すべし。夏は、ことに糊硬きものを著せたるは、主人よりも、主婦の見上げらるゝものなり。これに反して、頭髮は亂れ、衣服は皺寄り、帶は解けて地に垂れかゝりたらんさまにては、心の秩序なきが見透かされて、人に輕ぜ

らるべし。されば婦人は常に衣服に注意し、一は精神に締りをつけ、一は其の精神をあらはすに相應なる服裝をなすことを忘るべからず。

一七、流行

髪容より始めて髪飾・衣服はいふに及ばず、持物・履物の末に至るまで、同じ物に厭くは世の習にて、いとなく新しきふりに變り、それも厭けば更に新しき物に移り、かくして變化も大方に盡くれば、遂に又昔の形に立ち返るものなり。

御臺所

たとへば、今も世にある政子形の櫛は頼朝卿の御臺所政子の遺物を模したるなり。又かの古代模様とて、更紗蒔繪などに置くものは、奈良の舊都を始として、所々の神社・佛閣に残れる奈良時代の織物などより模して取れるが多し。染色にも利休鼠・遠州鼠など、昔の茶人の名を冠れるあり。これは、皆古きものが再び時に逢ふことのあるしるしなり。されば、流行に後れたる物、必ずしも劣れるに非ず、流行する物、必ずしも優れるに非ず。唯時々の目新しきを以て勝を取るのみなり。

嗜好
終日
させる理

其が中に、いとほでやかに人目に立ち、烈しく一時の流行を爲すものは、またいと疾く廢れ行きて、忽ちにして誰も顧みるものなきに至るものなり。これに反して、一たび行はれて、後、永く世に忘れられざるものあり。例へば、黒の紋服の如き、鮫小紋の如き、これなり。かゝるものは、「あな珍し」と目を驚す事こそなけれ、永く人の嗜好に適すること、譬へば飯のいみじき味こそなけれ、終日終歲、食ひても飽かざるが如し。かく、流行は、させる理もあらで、轉變極りなきものなるを、世には、朝に甲の様を尋ね、夕に乙の形を追ふ

うたてき事

人あり。よし金銀の浪費は顧みずとも、心定らず物に厭き易きは、いかにうたてき事ならずや。まして、流行の中には、或は商人の射利の目的より出で、或は卑しき輩より來るものも世に多かるをや。(帝國女子讀本)

一八 歲末の十日

二十二日 水曜日 日本晴風なし。蠅四五匹、切干を干したる筵の上に飛ぶ。漬物の手傳す。

二十三日 木曜日 手水鉢に薄氷張る。晝の暖さは昨日の如し。早朝より煤掃を始め、四時過終る。湯に

すがくし

木枯

入りて心地すがくし。二十四日 金曜日 空少しく曇りて、木枯身にもむ。髪を洗ひ、障子の張替す。山田の叔母土より葉書あり、病氣全快年明けて早々年禮に來らる。由報ぜらる。嬉し。夜更けて犬の遠吠頻に聞ゆ。

霜柱

二十五日 土曜日 霜柱立つ。午後より曇りて雪ちらつく。毛絲の涎掛を編み上げて岡山の雪子へ送る。仁川の姉上、青森の兄上へも、歳暮の小包出す。垣根の櫟の木に名も知らぬ小鳥來る。二十六日 日曜日 風寒し。強がりの三郎も足袋を

ぢゆ

勘定取

勘定取

はく。庭の山茶花散り始む。三郎の綿入の縫ひかけと、と子子の帯を縫ひ上ぐれば、夜は九時過になりぬ。風止みて月冴えたり。明日も大霜なる。二十七日 月曜日 霜白し。風なく暖なり。午前中洗張し、午後糯米を水に浸す。三郎相撲を取りて、綿入の袖を綻ばして歸る。町役場に會議あり、父上の歸り遅し。二十八日 火曜日 雨降り寒交る。勘定取前後して來り、新しき通帳を置きて歸る。柱曆數の子串柿蜜柑などの歳暮を貰ふ。

收入役

二十九日 水曜日 氷厚し。棕櫚の葉に風の音騒ぐ。收入役の木村様襟卷に顔を埋め、寒げなるさまして入り來られ、繩暖簾鼻で分けたる頭巾かな。といひて、一同を笑はせらる。父上より下駄・足袋・手拭など戴いて皆々喜ぶ。兄上賣物の山林を見に行き、大きな門松を持ちて歸らる。山を買ふ約束整ひ、今夜手附金を渡し、年明けて登記すべしとのこと。早く夕飯をすまし、餅搗す。隣の榮吉様夫婦手傳に來られ、賑し。宵寝の三郎も、遅くまで嬉しがりで餅を運ぶ。十二時搗き終る。

手附金
登記

調理

吹雪

やましき事

三十日 木曜日 昨日に引きかへて、氷なく、霜なく、風なし。柿の木の木根もとに落臺かすかに見え、水仙の花二輪咲く。兄上門松を立て、神棚を飾らる。仁川の姉上より小包來る。見事なる雁なり。調理して隣へも分つ。いづれも珍しがる。夕方獵銃を擔へる人、數多の獲物を携へて門前を過ぐ。

三十一日 金曜日 時々吹雪す。ごまめ・數の子・煮豆などの重の内・雜煮の用意も濟む。兄上と二人して年賀狀を認む。湯に入りて父上手製の晦日蕎麥を戴く。一年中の事を思ひかへすに、やましき事なく

果報

- 二一、俚諺十則
- 一、四百四病より貧の苦しみ。
 - 二、重荷に小づけ。
 - 三、笑ふ門には福來る。
 - 四、長者二代なし。
 - 五、遠い親子より近い他人。
 - 六、猪を見て矢をはぐ。盜人を見て繩を縛ふ。
 - 七、提燈に釣鐘。
 - 八、果報は寢て待て。天道人を殺さず。

九、石の上にも三年居れば暖まる。

十、立ちまらば大木の蔭に。

二二、旅順開城 櫻井忠溫

大雪の中を、若い者が勇み返つて、もし出て下さい。お寺へ集つて下さい。と忙しさに、驅けながら觸れて廻る。其の草鞋の跡が、白布を敷いたやうな路の上に印されて、まだ雪のこれを埋めぬ間に、お目出たいこととて御座んす。と挨拶して、蓑と蓑とが駈け違ふ。鎮守の社では、どんどこどんどこと太鼓を叩いてゐる。

鎮守

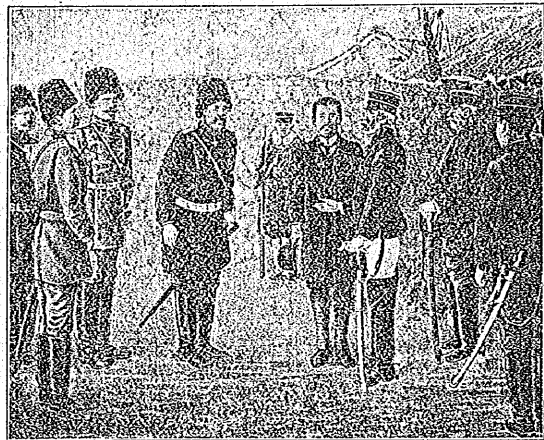
明治三十八年一
月二日

歡呼

不審

お寺では、こーん、こーんと鐘をついてゐる。旅順開城の一月二日は朝から雪が五寸も積つた。ひらくと降る雪は、武夫の心の花の散るかと思へた。

渡部といふ家の嫁は、子どもを負つて雪を衝いて家を出て行つた。暫くすると、ざくざくと雪を踏みながら、門前をどやくと歡呼して通る人も過ぎ去つて、雪は愈降りしきり、あたりは暗くなつて來たが、嫁はまだもどらぬ。爺さんは、炬燵にあたりながら、今日に限つて、何の挨拶もなしに出て行つたのを不審に思つて、この大雪に何の用があつて、子どもまで連れ



乃大木將とセツルと會見

て何處へ出かけたのか。村の寄合に行つたにしては、あまりに遅いと、炬燵の櫓に頭を伏せて、早く歸つてくれ、ばい、寒いであらうにと、風が枝の雪を拂ふ音にも、屋根の雪が庇をなだれる音にも、歸つたかと思つて、息をつめて聞いてゐたが、嫁の足音は聞えなかつ

恐怖

だ。

爺さんは心配のあまり、恐怖の念に襲はれて傘をさして足元危く家を出た。雪はますます降る。外を通る者は一人も無い。爺さんは隣家の窓の外から、うちの嫁は、今日寄合に行つとつたかな。といふと、内から「いゝ見えなんだぞな。」と答へる。爺さんは失望して家に歸つて、茫として降る雪を怨めしげに眺めて居るのであつた。

かれこれ時間がたつたところで、嫁は歸つて來た。爺さんは「歸つたか。」と飛び出す。嫁は笠の雪を拂ひ、蓑

納戸

凍え

を取つて納戸の柱にかけ、子供を内庭の縁へおろした。子どもは凍えた手を吹きながら、爺さんの膝に絶つた。おゝ歸つたか歸つたか。どこへ行つた。この寒いのに。手が凍えてゐるぢやないか。どこへまあ往つたのかい。」と鼻をつまらして孫を抱き上げる。

「どこへ行つたのかい。お母さんと。」と聞くと、孫は無言のまゝ、小さい手を合して、爺さんを見上げるのであつた。おゝどうした。と、爺さんは今日の事と云ひ孫が手を合して拜む様子と云ひ、いづれも不審に堪へない。

嫁は鹽に湯を汲み雪を攪んで入れ足を滌いで上つて來た。爺さんは「この雪にどこへ行つとつたか心配で心配で隣近所を搜して居つたが歸つて來てくれてまあよかった。嫁はもう涙である。御心配をかけました。私は旅順が落ちたといふことを聞いて、生きて居られたら、さぞ喜ばれるだらうにと思ふと、慄えられなくなつて、お墓へお知らせに、この子を負つて行きました。お父さんに云つたら、この雪にお止めなさると思つて、黙つて行きました。」といふと、爺さんは「忠次に知らせに行つてくれたか。さうであつたか。さ

草葉の蔭

外防禦線

寡婦

木標

りであつたか。忠次は、草葉の蔭で喜んでゐるだらう。」と、聲を惜しまず泣く。忠次といふのは、旅順攻圍軍に加つて、外防禦線攻撃中に戦死した彼の女の夫である。後に残つて歎く親や妻は、國のため亡き人のためいろく／＼な思で、朝夕箸の上げ下ろしにも、旅順が落ちるのを待ちわびてゐた。さうして、いよく／＼となつたので、直ぐさま寡婦は雪を冒して、亡夫の墓、遺骨も届かないので、心ばかりの木標を立てた亡夫の墓に、その事を報告したのであつた。

二三、飛行の話

岩本周平

モリス。

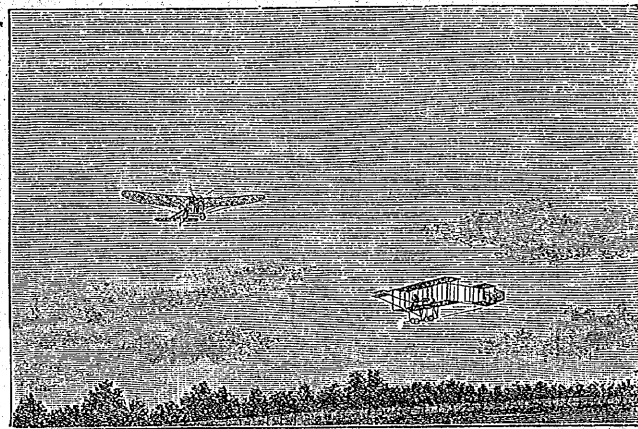
發動機

飛行のお話を致す前に、まづ飛行機の構造の大略を申し述べます。陸軍のモ式飛行機に就いて其の各部分を舉げて見ますと、上翼下翼發動機プロペラー、上翼と下翼とを連結する針金、操縦装置としての舵、左右の安定を保つ爲の補助翼等であります。

さて、飛行の練習を致すには、初は教官が座席に乗つて操縦し、練習者は後に乗つて見て居るだけであります。始めて乗つた時は何時の間に地面を離れたのやら、今どの邊に居るのやら、全くわからず、無我夢

發動機

介添



機行飛式モ

中であります。高い屋根高い樹へ登つた時の様な心持は少しも致しませぬ。只やかましい發動機の音が聞え、風が烈しく顔に當るだけであります。

次第に慣れて來ると、練習生が座席に乗つて操縦し、教官は後に乗つて介添の役をします。更に進むと、

空中滑走

教官はたゞ同乗して視てゐるだけであります。夫から單獨飛行をし、空中滑走をし、發動機を止めて着陸する稽古をし、最後に野外飛行をして夫で卒業するのであります。

突風

飛行すると、空中で色々な現象に逢ひます。突風に逢ひますと、機は恰も小舟が波にゆられるやうに、下からドンと突き揚げられて、次にスウと下り、再びドンと突き揚げられて復スウと下るといふ様な工合で、尻が座席から跳ね上げられることがあります。山を越える時には、殊に烈しい突風にあひます。風が山

馬子
衝突

の向ふから吹いて来る時には、風は山に沿うて登り、絶頂を越えると、又山に沿うて下るものです。今、飛行機が山を越えようとして風に逆つて進みますと、機は吹き下す風の爲に、如何に上舵をとつても上りませぬ。曾て、某飛行機が箱根を越えた時、どうしても上れぬので、山頂を越えるのを止めて、凹んだ峠に沿うて飛んだ處が、其の時、霧が深く、地面が見えなかつたので、前へ行く馬子に危く衝突しかゝり、馬子も馬も思ひがけず後から飛行機が地面を掠めて來たので、非常に驚いたといふ話であります。さて、山を越え

て反對の側へ行くと、今度は風が吹き揚げるので、下舵を取つても容易に下りませぬ。富士山の近所はこの吹き上げる風、吹き下す風が烈しく、一秒十米程の速力に達することがあります。今日の飛行機は一秒に三四米の速力でありますから、この風に逢ひますと、甚だ難儀を致すのであります。

又、一面に平らな雲の上、所謂雲海に出ることがあります。雲海に出ると、急に突風にあひます。一體、曇天には突風は無いのであります。それは雲の下のこととでありまして、其の雲の上には突風が盛に起つて

雲海

漠々

をります。これは太陽の光熱が雲の表面に當つて、地面と同様に反射するからであります。この雲海では、下を見ると、一面に漠々として、今何處を飛んで居るのか、一向にわかりませぬ。山の上か、河の上か、この雲を突き抜けて下へ行くと何處へ出るのか、少しもわからず、實に心細いものであります。殊にかの所謂入道雲には、常に強い突風が伴つて居ります。

大正四年八月十八日、私の友人が雲の爲に危険に遭つたお話を致します。朝の八時頃、曇天で風も穏かに、處々に小さな入道雲が浮んで居りましたが、飛行

入道雲

豫期

には好い日和でありました。友人は高度八百米の處を飛行して參りましたが、眼前に小さな雲が出て居ります。平生の通り、すぐ通り抜けられる積りで、其の雲の中へ這入りましたが、豫期と違つて、一寸の間に通過り抜けられませぬ。前後左右眞白な中をずんずん參りますと、機はとかく下向になるやうな氣がしたので、ハンドルを握つて頻に上昇しようと力めました。幾度も之を繰り返してゐる中に、ふと横の方に雲の切れ目が見えましたので、見ると、鐵道線路が垂直に立つてゐます。ハッ、機は横になつて居るな。と氣

墜落

刹那

が附きました。其の時、雲は忽ち四方を蔽うて、舵は矢張おし下げられるから、力を極めて抵抗しました。暫くすると、前面に雲の切れ目がありました。ヤア、眞逆様だ。と自分の正面に直立して見えました。ヤア、眞逆様だ。と知るや否や、力の限り上舵を引きましたが、プツンと針金の切れた音がしました。萬事休す。墜落。といふ考が閃いたと同時に、今日は八月十八日だといふ考が浮びました。由來所澤飛行場で飛行機の災難の起る日は、いつも八の日であります。夫で此の刹那に、友人の心にかやうな考が浮んだのであります。處が、ふと氣

附近

が附いて見ると機は既に水平に飛んで居て、高度計は四百米を指して居りました。即ち、友人は雲の中で四百米落ちただけで、幸に墜落を免れたのでありました。後で附近の或農夫の話を聞きましたが、其の子供が、「アレ、飛行機が落ちる。」と叫んだので、戸外へ出て見たら、最早低い處を平らに飛んで居たとのことでありました。これは入道雲の中に異様な氣流があつた爲に危難に出逢つたのでありました。（學士會月報）

氣流

二四 壯烈なる空中戰

得策

航空機が戦争に用ひられたのは、今度の歐洲戦争が始めてである。航空機の主要な任務は、敵軍の配備を偵察して、味方の軍隊が如何なる方面に砲火を向けるのが得策であるかを發見するにあるが、又深く敵陣地の上空を飛翔し、爆彈を投じ、鐵道や格納庫を破壊し、彈藥輸送車を爆破せしめ、爆彈を投じ、馬を驚して騎兵を離散せしめ、時には又敵機と空中戦を行う。ふこともある。今其の空中戦の有様を一つ二つ話さう。

或日、英軍の飛行機は高く空中に飛翔し、終に機影

突然

螺旋形

を雲間に隠して了つた。これは敵の目を掠めて、突然獨軍の陣地に近づかんが爲である。十分昇つたと思ふ頃、彼は螺旋形を畫いて再び雲間より降下し始め、突然明るい日光の下に出た。すると、其の眞下に敵の飛行機がプロペラを高く鳴り響かせ、翼を靜に動しながら飛んでゐる。彼は直にこれを攻撃すべく決心した。そこで圓くカーヴを畫いて敵機に向つて降下し、拳銃を以て攻撃した。その一丸が敵機飛行者の座席の傍に當つたので、敵は叶はじと直に降下し、彈丸の届かぬところへ遁れようとした。英機は遁さじと

經過

沈毅熟練

肉薄

追撃する。英獨の兩機は、暫くは互に有利な位置を得ようとして争ふ。下では獨軍が首を延して戰鬪の經過如何にと手に汗を握つて居る。獨軍の砲手は、味方の飛行機を打つ恐があるから發砲することも出来ない。ので悔しがつて居る。

英機は沈毅熟練な飛行者によつて操縦せられるのみならず、其の速力が獨機よりも早かつたので、突然敵機の側面に肉薄して、續け様に數發の拳銃を放つた。とたんに英機は白雲に包まれてしまつた。再び大きな圓を畫いて、日光の下に出て見ると、最早獨機

狙撃

致命傷

悠然

照準距離

の影は見えない。大方獨機は雲を衝いて上空に遁げたらうと思つた。その時、大砲の音にふと地上を見やれば、自分を狙撃してゐる獨軍陣地から程遠からぬところに、敵の飛行機が墜落して居るのを認めて、敵機に致命傷を負はせたことを知つた。偵察の任務を首尾よく果した英機は、再び空中高く飛翔し、悠然と味方の陣地に引き揚げた。

又、或日獨軍飛行機が、味方の砲兵中隊に、英軍の塹壕陣地砲撃の照準距離を信號で知らせて居た。英軍はその飛行隊に命じてこれを攻撃させた。英軍飛行

興味

者は、直に一時間に八十哩の快速力を有する複葉飛行機に打ち乗つて上昇した。塹壕内の兵士は、非常な興味を以て兩機の接戦を凝視してゐる。

英機は大きく半圓形を畫きながら、非常な速度で上昇し、獨機を狙撃する位置を得んと務めた。獨機には特に小銃を持てる兵士が乗つて居て、上昇する英機を目がけて突進して来る。その度毎に英機は巧に方向を轉じつゝ、上へくと飛翔した。間もなくばちばちと銃聲が聞えた。

「だんく、激しくなつて来るぞ。」と塹壕内の兵士が

叫ぶ。

數分間、兩軍の飛行機は互に有利な位置を得んと、頻に機體の操縦に務めた。この時兩機は殆ど同じ高さである。

兩機が互に接近した時、又銃聲が聞えた。衝突したんだ。と塹壕内の兵士の一人が興奮した調子で云ふ。ばちくくと又しても銃聲が響く。獨機は暫し苦しい立場にあるやうに見えた。やがて獨機は徐々に上昇し始め、英機も亦上昇した。高くく上昇するまゝに、兩機はだんく小さくなつた。

興奮

敏捷

着陸

數分の後、再び銃聲が聞えた。昇つたり降つたり、此方に廻り、彼方に飛んで、兩機は互に有利な位置を得ようとして争つたが、終に英機が巧に敵の上方に昇つた。その運動は非常に敏捷で、恰も急に非常な高所に跳ね上つたかの様に思はれた。すると獨機は危ふげに一方に避けたが、やがて英軍の塹壕の後方に墜落した。獨機の操縦者が撃たれたのである。英兵は塹壕の後方に着陸した英機を圍んで萬歳を唱へた。

二五、北海道の冬

志賀重昂

雪意

西北風、亞細亞大陸より、日本海上の水蒸氣を吹き
來りて、北海道中央の大山系を撃つや、忽ち凝結して、
雪意漸く動き、九月下旬に至れば、凍雨霏々として木
葉散落し、石狩岳上、早く白皚を被るを見、十月中旬に
は、札幌市西の手稻山上、雪既に降り、十二月以降は玉
屑浙瀝として、悉く石狩の平野を蔽ふ。雪既に石狩の
平野に降れば、橇車は三々五々街上を往來し、頗る奇
觀なり。然れども、此の地に於て、奇觀中の最も奇觀と
もいふべきは、原人時代の山林中に、雪の堆積せる所
これなり。想ひ起す、滿眸一白、榆樹は枝々玉を懸け、其

玉屑浙瀝

原人時代

滿眸一白

皎光翠色相
點綴す

歷々

氣局を恢弘
にす

龜裂

神渡

の間に蝦夷松、棋楠の聳立して、皎光翠色、相點綴する
所、兩群の鴻雁凍雲を渡り、一陣の天風時に氷海を剪
りて來るを、北方豪健の象歷々眼にあり。眞に文人畫
師の氣局を恢弘にするに足れり。
東海岸に至れば、寒冷なる海流、北極圈より來り、三
冬の間は、海上一面に氷に鎖さる。而して、氷は氷結の
際、その容量の百分の七増加するものなれば、氷ます
ます張り詰むるや、遂に龜裂を生ず。これ信濃諏訪湖
の神渡と稱し、氷面に一條の大割線を生ずると同一
の趣にして、その後は人馬も安らかに氷上を渡過す

ることを得るなり。

又此の氷上、到る處小屋散點し、以てコマイ魚を釣る。この魚は、冬期間根室灣中に群游し、氷に小穴を穿ちて綸を垂るれば、忽ち潑刺として鈎にのぼり來る。これ亦諏訪湖の氷引とて、漁人の鯉・鮒・鯰・アカウオを釣ると同一趣向にして、南方人士の見ることに能はざる所、また一の奇觀なり。

潑刺

二六 憲法發布

落合直文

明治二十二年二月十一日は、皇祖神武天皇即位紀

*明治天皇

元二千五百四十九年の大祝日なり。我が惠深き天皇陛下には、畏くも此の日を以て憲法を發布せられぬ。待ちに待ちたる三千五百萬の臣民の喜は如何にありけん。

此の日の式場は千代田の宮の正殿にして、いと麗しうしつらはせ給へり。中央に兩陛下の玉座を設け、其の左右に各宮殿下、各華族百官、有司、各國公使等の座を設けたり。朝の間雪少し降りしが、やがて麗かに霽れわたれり。

午前九時、天皇陛下には先づ賢所を拜ませられ、憲

皇座
御座
中央

しつらふ

有司

賢所

法發布のむねを申上のべさせ給ひ、午前十時、兩陛下には侍従に神器を捧げまつらしめて、君が代の奏樂のうちに正殿に臨ませられ、ついで玉座に着かせ給ふ。かくて三條内大臣、恭しく帝國憲法を獻りしに、陛下には御聲うるはしく勅語を讀み上げさせ給ふ。やがて黒田内閣總理大臣、御前に進み出でしに、陛下には御手づから帝國憲法を授けさせ給ふ。總理大臣跪きて之を受け奉りし時は、滿場の群臣皆喜の色をあらはせり。時に百一發の祝砲は盛に殿外に響きて、いと勇まし。かくて再び君が代の奏樂起りしが、兩陛下

には靜に入御あらせられぬ。

此の日、伊勢神宮、畝傍山及び月輪の山陵には、特に勅使をたてさせ給ひて、其の旨を告げさせ給ひ、又岩倉具視、島津久光、毛利敬親、山内豐信、鍋島直正、大久保利通、木戸孝允の墓にも其の旨を告げさせ給ふ。かくて大赦を行はるゝはさらなり。西郷隆盛の賊名を除き、正三位を贈らせ給ひ、藤田誠之進、佐久間修理、吉田寅次郎等には正四位を贈らせ給ひ、又全國八十歳以上の男女には金を賜ふなど、ひろき御惠のほど、いたり及ばぬところもなし。

大赦

御通輦

識

舞樂

革命

腥き風
血の雨

和氣洋々

午後零時三十分、兩陛下には青山の觀兵式に臨ませ給ふ。其の行幸ををがみ奉らんと、御通輦の道には人を以て山を築けり。此の夕、百官有司に讌を賜ひ、夜に入りて舞樂などの御催あり。

あはれ、他の國々にて憲法を發布するや、常に革命擾亂のあまり、腥き風を吹かせ、血の雨をふらするが例なり。さるを、君臣上下和氣洋々のうちに、かゝる大典を挙げさせられぬ、我々は多言せず、唯かゝるめでたき國體は、他にまたあるかを問はんのみ。

(中等國語讀本)

二七、初度の歐洲行

福地源一郎

聘問
派遣
携帶

文久年間、徳川幕府は、竹内下野守・松平石見守・京極能登守三人をば特命全權公使に任じ、歐洲なる條約諸國に赴きて、聘問の禮を修めしめたり。余も亦幸にしてその員末に列することを得たるが、これ誠に我等が初度の歐洲行なりしなり。

一行の乗船は、特に英國より派遣せられたる軍艦と定りけるが、英國公使よりは、屢使を以て「なるべく一行の人數を減じ、その携帶の荷物をも節略せらる

格式

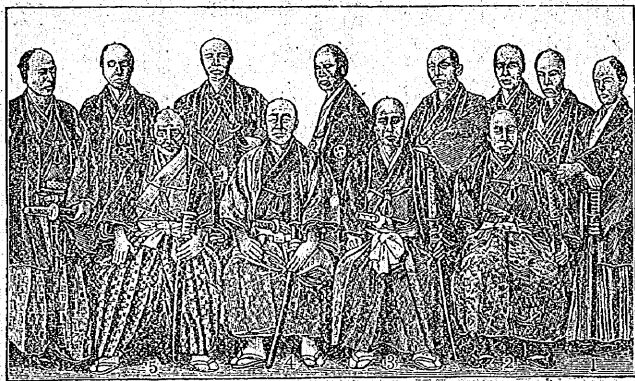
採用

英斷

べし。と注意せられけり。されど、何事につきても格式といふことや、かましかりし當時の事なれば、この注意はなかく、に採用せらるべくもあらず。非常の減員をなしたりといふ一行は、なほ三十人にあまれり。殊に、その荷物に至りては、將軍家より各國の帝王、宰相に宛てられたる贈品、一行の携帶品等、積みて山を成せり。また、その出發の支度につきては、全く歐洲の事情を知らざりし當時の事とて、後日の笑話となりしもの少からず。

まづ、駕籠持槍、甲冑、挾箱の類は、非常なる英斷にて、

腐敗



1 耶一源地福 2 耶太良田榮 3 守登能經京 4 守野下内竹 5 守見石平松

持參に及ばずと決したれど、なほ、三使にはその用意無くてはとて、手槍、及び鞍、鎧の類をば持參せられたり。それより筆、墨、紙はいふに及ばず、白米、醬油、香の物の類に至るまで、悉くこれを用意したり。さて、味噌は腐敗し易きものなれば、通常品のにては物の用にも

切に
さしで口
一切

立つべからず、いかゞすべきかとの事にて、評議まぢ
まちなり。我等は、切にその無用なるべきを説きたれ
ど、勤向以外の儀にさして口は一切相成らずと、一言
の下に叱り付けられたり。さては、いかに成り行くべ
きかと思つてあれば、ある軍學者の説とかにて、甲斐の
信玄が軍用として傳へたる、萬年味噌の祕傳なりと
いふ法に従ひて、にはかに製造せらるゝ事となれり。
かくて、それをば瓶數個に詰めて持参したりけるが、
笑止や、さすかの萬年味噌も、熱帶の溫氣には敵が
たく、香港とシンガポールとの間にては、やくも腐敗

祕傳

笑止

異臭

してその異臭堪へ難く、遂に空しく海中に投げ棄て
たりき。

遍歴

崎嶇渺茫

次に、またをかしかりしは、草鞋の詮議なりき。諸國
遍歴の長途に、到る處、必ず鐵道あり、馬車ありて、我等
の便に供せらるべしとは信じてたし。たとへば、山嶽
原野の崎嶇渺茫たる、車も通はざる如き境に至らば
いかにすべき。よしや、三使の乗馬のみは尋ね得とせ
んも、一行三十餘人の乗馬は、いかに西洋なればとて
到底これを得べき道はあらざるべし。ざる場合に當
りて、第一に無くて適はぬものは、履物の用意なり。假

恥辱

にも西洋の靴など用ひんは、この上もなき神州の恥辱なりとて、専ら草鞋の用意に取りかゝりしが、これもある軍學者の説とかにて、甲州流の軍用茗荷草鞋といふものを、千足ばかり造られたり。固より船中にてはその用なければとて、まづ郵船に託して、佛國のマルセイユに廻送し置きたりけるが、到着の後、一足も用ひずして空しく同所に留め置き、歸路に及びて、その取棄方を佛國の接待官に依頼して別れたりき。かくて一行は文久元年十二月を以て、いよく品川沖より英國の軍艦に乗り込みたり。英國軍艦にて

廻送

待遇

好尚

規律

干涉

壓制主張

奔命に疲る

は特別の注意を以て一行を待遇し、頻にその便利を圖りくれたれど、飲食より始めて、衣服坐臥に至るまで、全くその好尚を異にせるをいかにかせん。艦長・士官等は、日本使節のいかにも不作法にして規律なきに困じて、少しく規律を守らんことを望み、一行はまた艦長・士官等が瑣細の事までの干涉を厭ひて、甚しき壓制なりと叫び、互にその主張を固執して、彼我の意志少しも疏通せざりければ、その間に立ちたる我等通辯・翻譯係のものは、たゞその奔命に疲るゝのみなりき。

順次

さて一行は香港より諸所に寄港し、スエズを過ぎて、まづ佛國に著し、次いで英國に渡り、かくて順次歐洲諸國を歴遊し、諸國の案内に應じて、歐洲文明の事物を看盡したれども、一行中の二三人を除く外は、別に益することもありしが如し。汽車中の失敗宴席上の疎忽、今より追想するも、ひとり打ち笑まるゝ事のみ多かり。(懷往事談)

追想

二八、太平洋

大和田建樹

怒る波、さかまく潮、打たば打て、襲はゞ襲へ、

苔のむす巖

龜の住む島と榮えて、苔のむす巖とたちて、
はてもなき太平洋の海原に、輝き出でし
日の本つ國。

人の世は變り行けども、變らぬは海原の色、
國の様移り行けども、うつらぬは波風の聲、
ひと筋の天つ日嗣を、戴ける國は動かじ、
千代に八千代に。

言とふ

言とはん、太平洋の海遠くあそぶ嵐よ、
かくの如、動かぬ國は、天地にたぐひありやと、
神代より根ざし堅めて、君と臣、ひとつ心の

鏡なす

國はこの國。夜は明けぬ。年は還りぬ。鏡なす初日の影は、
亞米利加の岸まで續ぐ。海原に浮び出でたり。
誰か見て仰がざるべき。國民の心もならへ、
光みがきて。

二九、知らぬ友その一 杉谷代水

出帆

頃は夏の末つ方なり。海面を吹き渡る風や、荒く、
空の雲行も定らぬ日。支那の上海より、我が長崎へ向
けて出帆する某會社の汽船あり。多き乗客の中に、顔

挨拶

立やさしく、振舞卑しからざる一人の少女あり。年の
程は十二三にやあらんや、古びたる單衣著て、足袋
をはきたり。前の櫓の下に巻き重ねたる綱の上に、腰
をかけ、つくぐと海の面を眺め、またをりぐ乗客
水夫らの方を見るさま、何となく故ありげなり。
船は港を離れぬ。一人の水夫は、舳より同じ年頃な
る少女を連れ來りて、彼の少女に引き合せ、靜江嬢よ、
御身の友なるべき富子嬢を伴ひ來れり。と言ひ捨て
て、彼方へいそぎ行きぬ。富子は僅に挨拶して、恥かし
げに頭を垂れ、また帆綱に腰をかけぬ。靜江は、先づ聲

默然

をかけて、御身は何處へ行かるゝにか。」と問ふに、富子は唯「國許へ。」と言ひしまゝにて、暫しが程は默然たりしが、やがてまた「馬關にて乗換へて、濱田まで行くなり。」と語をつぎたり。

動搖

模様

これにて話は途切れぬ。靜江は持てる風呂敷包の中より、菓子など取り出で、富子に分ち與へつゝ、自らも食し始めたり。かゝる處に、前の水夫出て來りて、兩人に向ひ、海面荒れん模様なり。氣をしかと持たれよ。と口早く言ひつゝ、甲板をおり行きしが、間もなく風強く、浪高くなりて、船體いたく動搖し始めぬ。されど、

氣色

緣者

此の少女らは、何れも船には慣れたりけん、怖るゝ氣色もなく、また一言二言と語らふ中、漸く親しくなりて、後には互に我が身の上など語りいだせり。靜江は、近き頃上海にて兩親に死に別れ、頼むべき方もなければ、神戸に歸り、母方の緣者をたよらんとて、この船には乗り込めるなりといへば、富子は、數年前養母なる叔母に連れられて、上海に行きたりしが、不幸にも、一月前に叔母の死にたるがため、知りあひの水夫に託せられて、故郷なる兩親の許へ歸る途中なりと語る。

懷中

まらわぶ

富子は懷中より取り出だせる編物を編みながら、家のことなど言ひつゞけて、父上も、母上も、ともにわれを待ちわび給ふらん。四人の弟妹も、久しく遇はねば、如何ばかりか喜ぶらん。御身にも兄弟の御座すらん。幾人にか。など問ふ。靜江は、否、われには兄弟とては一人も無し。同じ不幸の中にも、羨ましきは御身が上なり。など答ふる聲も、いと重げなり。

かゝるほどに、黒き雲は海の面を覆ひて、波はいよいよ荒れまされり。二人は別れて、各の室に入らんとするをりしも、彼の水夫は忙はしげに、今宵はとても

斑點

寢られじ。と云ひながら、船長室に馳せ行きしが、此の時はや、激しき浪は、不意に甲板に打ち上げて、靜江を二三尺ばかり、前へどつと打ち倒しぬ。富子は驚き馳せ寄りて引き起し、と見れば彼の額は傷つき、血さへ滴れり。急ぎ手巾を取り出でて、傷口に當て、しかと抑へて結びつゝ、痛みはせずや。と問へば、靜江は、否と答へ、厚く禮を述べて、おのが室にと下り行けり。この時、濃き一滴の血潮は、富子の白き襟に、小さき紅の斑點を染め出だせり。

怒濤

三〇、知らぬ友その二

夜に入りて、風は一層烈しくなり、怒濤の舷を打ち甲板を洗ふ音、いと物凄く、前の櫓は吹き折られぬ。かくて、夜の明けんとする頃には、欄干は折れ、煙突は碎け、剩へ海水機關室に入り來りて、火はこれが爲に消されたれば、船は運轉の自由を失ひぬ。

狼狽

かゝる様なれば、乗客の狼狽一方ならず。船中を上を下へと馳せ廻り、思案盡きて神に祈るもあれば、船長室に辿りつき、われらは如何になり行くべきかと、泣かんばかりの聲して尋ぬるもあり。船長は水夫を

防禦

激浪

勵まして、さまざま防禦に力を盡せども、山の如き大浪は、瀧の如く船中に侵入し始めぬ。風はいよく、烈しく、船體の動搖はますます、甚しく、見るが中に、三艘の短艇は浪に奪はれたり。船長はもはやこれまでなりと、水夫に命じて、更に二艘の短艇を下さしめしに、忽ち激浪に覆されて、見るく行方知れずなりぬ。彼の水夫も、あはれ、この時海底に沈みはてけり。客室は次第に水に浸されて、乗客の命は、船體と共に刻々に消え行かんとす。頼むは、たゞ残る一艘の短艇のみなり。船長は最後の號令を發して、これを下さしめぬ。人

落膽

々それと見るより、先を争ひて飛び込みぬ。なほ、身の
輕き女子どもならば、一人は乗り得べし」と、水夫の叫
ぶを聞きて、一人の婦人は、舷側に出でしかど、浪は荒
し、短艇は定らず、落膽してそのまゝ、其處に泣き倒れ
ぬ。

この時まで、彼の靜江と富子とは、死を覺悟して、船
の沈みゆくを待つのみなりしが、水夫らが「子どもは
居らざるか」と呼び立つる聲に、靜江はわれこそと、あ
たりを押し分けて進まんとせしに、ふと眼につきし
は、彼の富子が襟さきの血潮の跡なり。靜江は、つと富

端然

子の傍に寄り、「われよりも、この人輕し」と言ひもはて
ず、富子を抱きて、「御身は兩親も有る身なり。早く乗り
たまへ」とて、短艇を目懸けて突き落しぬ。富子は少し
く短艇を外れて、激浪の中に陥りしが、忽ち水夫に救
はれて引き揚げられぬ。靜江は、思はず喜の笑を漏し
つゝ、暴風に凜々しき面を曝しながら、端然として甲
板の上に立ち、短艇の方を見おろしたり。短艇は母船
を離れて、怒濤の中を潜り行く。富子は、今しも我にか
へりて、甲板の方を仰ぎ見つゝ合掌せり。靜江は手を
高く上げて、何事をか叫びたれど、嵐にとられて聞ゆ

べくもあらざりけり。

この時、乗客の多くは、浪に奪はれ、残る者も今ははや死せるが如く、聲を出すものもなし。水は既に甲板を浸しぬ。又も打ち寄する怒濤の中に立ちて、胸に手を當て、はたと跪きしは彼の靜江なり。

短艇は逆捲く大浪を潜りくぐて、黒く垂れたる雨雲の下を漕ぎゆく。富子は、顔に手を當て、しばし泣き入りしが、再び顔を揚げたる時は、もはや母船の姿は見えざりき。

怒濤

三一、石炭

落莫

我等が利用する天然物の中に、その最も要用なる物は何なるかと問はゞ、何人も先づ指を石炭に、屈するなるべし。今假にこの石炭をば、姑く我等の手中より取り去られたりとして、その結果を想像せば、我等の産業社會は、そこにいかなる落莫の觀を呈すべきぞ。すべての蒸氣機關は、殆どその運轉を止め、交通の最大機關たる陸の鐵道、水の汽船も、亦動かず。この新世紀の文明は、まさにその一半の光輝を失ふに至らん。あゝ、何人かかゝるいまは、しき想像に堪ふるも

ので。

英國の工業は、世界の最も隆盛なるものと稱せらる。その然る所以のものは、主として英國が石炭の產出に富めるによれりといへり。かつて世界の海國と稱せられて、領土全地球に遍かりし彼の西班牙國は、限なき多額の金銀をば、その新領土より齎し歸りて、頻にその富に誇りたりき。されど、その結果はいかに、美しき貴金屬の光に眩目し、その富に心酔したるこの國民は、相率ゐて皆遊蕩懶惰の風に移り行きて、國勢は遂に衰へぬ。英國は、これに反して、その產出する

眩目
心酔
遊蕩懶惰

偶然

埋没
化成

多額の石炭を利用して、頻にその工業を勵み、遂によく今日の富を致すに至れり。かくて、彼等は常に「我等の石炭は、よく貴き金銀にうち勝てり」といふとがや。思へば、工業社界の人々が、これを賞揚して「黒き金剛石」と呼ぶもの、決して偶然にあらざるなり。さても、石炭はいつの時代に、いかにして成立したるものなるべきか。學者の説によれば、石炭の地層は、きはめて舊き時代の成立に屬すべきものにして、その時代に、地上に生息したりし植物が、地中に埋没せられて、かくて、このものに化成せるなりといへり。し

かして、その植物は、主として蕨・木賊・石松のたぐひなりとか。

當時の植物界が、いかにおそろしき發育をなして、いかに雄大なる繁茂の光景を呈したりしかは、われらの到底想像し得べきものにあらず。その石松の如きも、大抵十間にあまれる高さありて、われら人類が、未だ生息せざりし太古の自然界に、ひとりその繁榮を競ひしなり。嘗て外國のある鑛區にて、石炭の地質中より太古の木賊を掘り出したることありしが、幹の直徑五寸に過ぎたりといへり。實に驚くべきにあ

鑛區

らずや。

さて、これら前世界の植物が、いかにしてこの石炭に化成したるかといふに、吾等の知ること能はざる。一大現象ありて、地中の泥土は一時にそこに噴出し、かくて、これらの植物をば、生きながら深く地中に埋没せしめしが、そこにまたわれらの想像すること能はざるばかりなる、おそろしき熱と壓力とありて、それによりて、遂にかゝる一種の特産物をば化成したるものならん。

特産物

かくて、數百千年の間、この石炭は、ふかく地中に埋

舞臺

端緒

沒せられて、嘗て世人の目に觸るゝこともなかりしが、近く數百年のむかし偶然に發見せられたり。されど、そのはじめは、たゞ僅に山村のはかなげなる小屋にて、その夜毎の燃料に用ひらるゝのみにて、さまで世人の注意を引かざりしが、工業の進歩につれて、いつかその效用の著しきことを認められ、遂に活潑なる産業社界の舞臺に上るに至れるなり。(中等國語讀本)

三二、玻璃の發明

些細なる注意が原因となりて、偶然に大發明の端

沙漠

緒を得しめし事は珍しからず、玻璃製造の發明の如きも其の一なり。

今より數千年前、亞弗利加の沙漠を旅行せし一隊の商人ありき。或朝、沙を掘りて竈を造り、朝飯の調理を終へし跡を見るに、灰の中にきら／＼と光る一粒の珠ありけり。その質堅く透き通りにて、光澤ある様、水晶に似たり。今までは、此處に無かりしこと明なり。さりとて、天より降り來れるものとも思はれず。商人思ふやう、こは必ず沙の中にかゝる珠になるべき物質ありて、今焚きし火の爲に熔けて集りたるものなら

件

石英

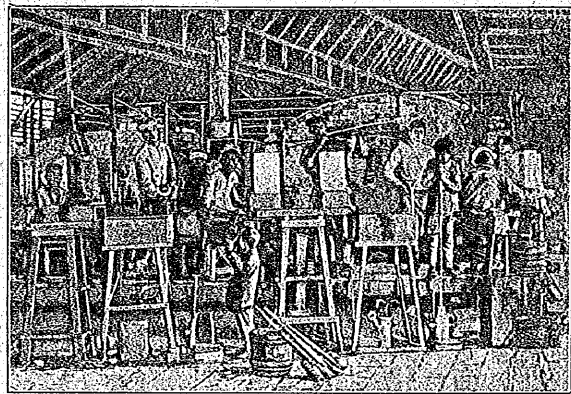
原料

ん。よしく、此の沙を埃及に持ち行きて、學者に示さば、かゝる珠を製造すべき工夫もあらんと、乃ち其の邊の沙と共に、件の珠を取り收めて埃及に持ち行き、ある學者にしめして、事の次第を語りぬ。學者受け取りて、いろくに取り調べけるに、果して沙中に石英といふ礦物ありて、彼の珠の原料なることを發見したり。斯くて、石英を用ひ、さまぐに工夫して、つひに其の珠の製法を發明しき。これ即ち玻璃製法の始なり。

チトレン 但し本問

玻璃の用は甚だ廣し。ランプのホヤに造り、藥壇に

便宜



造製の器璃硝

製し、或は板となして窓に張り、或は種々の眼鏡に造り、又器械に用ふ。今の世に、玻璃なきときは、ランプありとも、電氣燈ありとも、其の用をなさじ。藥品も便宜なる入れ物を缺き、家屋も透明なる障子を缺くべし。しかのみならず、顯微鏡、望遠鏡等を作る能はざるため、醫學、理學、天文學などの

遲滯

進歩遲滯せざるを得ざるべし。

謝意を寄す

かく考ふれば、今人は玻璃製造の發明者に對して、深く感謝せざるべからず。又玻璃の原料を發見せし彼の注意深き商人に對しても、多少の謝意を寄すべきなり。

三三、母の感化

福澤諭吉

凡そ世の中に何が怖いと云つても、暗殺は別として、借金位怖い者はありません。他人に對して、金錢の不義理は相濟まぬ事と決定すれば、借金はますますく

生涯

返濟

不如意

怖くなります。私共の兄弟姉妹は幼少の時から貧乏の味を嘗めつくして、母の苦勞をなまされた様子は、生涯忘れられません。貧乏士族の衣食住、その艱難の中に母の感化をうけた事が數々あります。其の一例を申せば、私が十三四歳の時、母に云ひつけられて、金子返濟の使をした事があります。其の次第はかういふことです。

天保七年、大阪で私どもが父の不幸に逢つて、故郷の中津に歸りました時、家の普請をするとか何とか云ふのに、勝手向は勿論不如意ですから、人の世話で

頼母子講

頼母子講を拵へて、一口金二朱づゝで、何兩とやら纏まつた金が出来て、一時の用を辨じました。さて夫から毎年幾度か、講中が二朱宛の金を持ち寄り、鬭引で満座に至つて皆済となる仕組であります。が、大家の人は、二朱ばかりの金の爲に、幾年もこんな事に關係して居るのは面倒だといふ所から、一時二朱の掛金を出した儘で、手を引く者があります。是を掛棄といひます。其の實は、講主が人にたいし金を貰ふやうな事で、すが、一般の風俗で怪む者もありませんでした。ところが、私の家の頼母子に、大阪屋五郎兵衛とい

融通

ふ廻船屋が、一口二朱を掛棄にしたさうです。勿論私が三四歳の頃の事で、何も知りませんでした。が、十三四歳の時、或日母が私に申すに、「お前は、何も知らぬ事だが、十年前にかういふ事があつて、大阪屋が掛棄にして、福澤の家は、大阪屋に金二朱を貰つたやうなものだ。誠に氣が済まん。武家が町人から金を恵まれて、それをたい貰うて、黙つて居ることとは出来ない。疾うから返したい返したいと思つては居たが、どうもさう行かなかつた。やつと今年は少し融通が付いたから、此の二朱のお金を大阪屋に持つて行つて、厚

く、禮を述べて返して來い。」と申して、其の金を紙に包んで私に渡しました。それから、私は大阪屋に參つて、金の包を出すと、先方では意外に思つたか、御返濟など、は、却つて痛み入ります。もはや古い事です。決してそんな御心配には及びません。」といつて、頻に辭します。私は、母の云ふ事を聞いて居るから、是非渡さねばならぬと、互に押し返して、口喧嘩のやうに争つて、金を置いて歸つた事があります。今ははや、五十二三年も過ぎて、むかしくの事でありますが、其の時母に云ひ付けられた口上も、先方の大阪屋の事も、ちや

舉動

んと記憶に存して忘れません。年月日は覚えてませんが、何でも朝の事でした。豊前中津下小路の西南の角屋敷で、其の時主人五郎兵衛は留守で、弟の源七に金を渡したと云ふ事まで覚えて居ます。こんな事が、幼少の時から私の腦中に遺つて居ますから、金錢の事に就いては、如何しても大膽な横著な舉動は出来ません。それから段々成長して、中津に居る間は申すに及ばず、二十一歳の時、始めて長崎に行つて、勿論學費のあらう筈もないから、不自由ながらに蘭學を學んで居る間も、其の後大阪に出て緒方

先生の塾に入つて、修業して居る間も、相替らず金の事は恐ろしくて、只の一度でも他人に借りた事はありません。江戸に來た後も同様です。

催促
一口に云へば、私は借金に就いて大の臆病者で、少しも勇氣がありません。人に金を借用して、其の催促に逢うて返す事が出來ないと云ふ時の心配は、恰も白刃を以て後から追ひかけられるやうな心地がするだらうと思ひます。

三四、十錢銀貨の來歴談 坪内雄藏

精製

型

われ、もとは但馬國生野の鑛山にありし銀のあらがねなり。先年掘り取られ精製せられて純銀となり、明治二十六年大阪造幣局につれゆかれて、ここにて型に入れられ、十錢銀貨といふ名を貰ひ、やがて數萬の兄弟と共に、某銀行に渡されたり。それより始めて世間に出で、人々の手より手に渡り歩きの忙しさ、或時は一日に數百里を走り、又、或時は一時間に數十個處を経めぐり、今日までの間に、凡そ日本の國內は何れの隅々も、我が知らぬは殆どなし。この間の出來事を、一々語らんはもとより難し。今は面白しと思ひし

紳士

二三の話ばかりを語らん。

二年以前、われは某紳士の車代となりて、東京の神田區にて、若き車夫の手に渡されき。かくて、其の車夫の腹がけのかくしに入れられてありしが、夕飯後、件の車夫は、衣服を著かへ破袴を著けて宿を出づ。意外の事かなと思ふうち、とある學校の教場に入りぬ。夜學に通ふなりけり。三時間の後、車夫は宿に歸り、ラジプの下にて、更に書物を默讀して十三時頃に及びたり。さて寢に就き、翌日は五時に起きて、辻に出て、車をひきて終日稼ぎ、夜に入ればまた學校に通ふこと昨

默讀

壯

夜の如し。

とら

かゝる苦學の書生もありと、噂には聞きたりしが、實際には始めて見て、そゞろに感に堪へざりき。永くこの人の側にありて、その行末を見たれと思ひ、此にやがて兄弟分の貨幣二つ三つと共に、われは一冊の書籍に代へられ、或書肆の手に渡されたり。かくて、書肆より印刷所へ、印刷所より職工へと渡り、さて件の職工より家賃として或家主の家に移りしが、この家にて、我は兄弟分四十九人と共に、一包の棒に束ねられ、同じやりの棒數十個と共に、暗く冷き

開けよかし

金庫に入れられたり。窮屈退屈忍ぶべからず。早くこの蓋開けよかしと念ぜしかひもなく、三日経ても五日経ても開かばこそ、都合五個月目にして、やうくに取り出され、或小間物屋の主人に渡されたり。さて小間物屋にて、われ等の一半は品物の仕入金となりて問屋に拂はれ、残る一半は若干に分れて種々の用途に立ちしが、われはこの中にて、地方廻りの手代に渡されて、小間物の荷物と共に、上野の停車場より汽車に乗りて、福島縣若松の近村に著きぬ。かくて、宿料となりて、兄弟三人と共にその村の宿

機會もがな

屋に渡され、翌日更に米代となりて、或農家の手に渡りたり。その日、鎮守の社の大祭あり。我は其の息子太郎吉の小使錢となりて、賑やかなる村の祭禮に伴はれ、その晩遂に西洋手品の木戸錢に拂はれたり。この手品師、若松より米澤、米澤より秋田、秋田より新潟とめぐりくし間に、わればかりは、不思議にもつまみ出されずして、遂に敦賀・大津・京都を経て、故郷なる大阪に立ちかへりぬ。日に開けゆく御代のことなれば、以前にくらべてかはりたる處も多かるべし。願はくはこの手品師の手より離れて、都會見物の機會もが

なと祈りをりしに、或日の晝過ぎ、遂に幸運を得て、散髪屋の手に渡りぬ。

腑に落ちぬ

さて、この散髪屋より、その日直に呉服屋に渡りしが、呉服屋に二三日滯留する中、新に錢箱に入り來りたるあやしの貨幣あり。顔かたちいさゝかも我等の兄弟にかはる所なけれど、どことなく腑に落ちぬ様子なり。かくて、翌朝我等は集められて、數百の兄弟と共に、銀行に持ち行かれたり。

銀行にては、洋服著けたる役人、我等を一室に入れて、一つづつに検査を行ひぬ。この検査室には、我等の

贋造

仲間あまた居り、大いなるゾックの袋に入れられて、室の隅に置かる。さて役人の我等を検査することの早きは驚くに堪へたり。つまみて投ぐるよと思ふ間に、検査は終るなり。此の時、彼のあやしの貨幣は、忽ちにして見咎められ、板の上に投げ出されしに、その音甚だ濁りたりしかば、「贋造」と宣告せられて、傍の籠に投げ込まれき。鋭きは役人の眼なりけり。その外にもはね出されしもの、なほ三人ありき。

銀行の金庫に在ること七日にして、我は引き出され、某藥舗の預金利子として支拂はれき。

取引

晦日

吝嗇家

それよりさきも、處かはれば品變りて、見る物毎に珍しき世の有様、こゝに語り盡すべくもなし。總じて、都會の方は取引しげゝれば、我等は晝夜とも殆ど休む隙もなく、西へ東へかけあるき、殊に晦日の夜の如きは、目も昏み氣も絶ゆるばかりなれど、我等もと旅行好きのうまれなれば、聊も苦しと思はず。物靜なる地方の人の手に渡り、或は吝嗇家の庫に藏められて、何個月も休み居る間こそ、中々の苦しみぞかし。さて、我が經來りし數萬の人の中にも、節儉と吝嗇との別を辨へ能く聚めよく散ずる人は甚だ少し。

聚散

廉潔

しかも、その聚散の宜しきを得ねば、財産家にはなられずとぞ。御身たちよく心得給へ。

三五、廉潔と節儉

藤岡作太郎

古の武士は廉潔を貴び、利慾を賤しみて、金錢の如きは深く顧みざる風ありき。直江兼續は上杉謙信に仕へて、武勇の名ありし人なり。嘗て諸大名の聚樂の第に伺候せし時、兼續も亦座にあり。談笑のついでに、伊達政宗懷中より金貨を取り出して人々に示せり。その頃は新に貨幣の鑄られし折なれば、皆々珍しと

采配

て手より手に渡しめぐらしてもてはやす。御身も見られよ。といはれて、兼續は扇をひろげて、その上に受け取り、そのまゝに、うち返しはね返しして見居たり。政宗、遠慮するなりと思ひて、苦しからず、手に取られよ。と言ふ。兼續うち笑ひて、謙信に従ひし時より、先陣の下知して采配振りたる手の汚れ候ふべし。これにて事足り候。とて、扇の上より投げ戻したれば、政宗赤面して返すことばもなかりきといふ。

土芥の如くす

さればとて、古の武士も、金錢を土芥の如くせよといひしにはあらず。たゞ濫に費して奢侈となり、ひた

客齋
節操

三枚におろす

すら惜みて客齋となり、節操を曲げ、義理を輕んずるに至らんことを嫌ひしなり。日根野備中の朝鮮に使用する時、旅資に事缺き、黒田如水に金子五十兩を借りしが、歸國の後、返金せんとてその家に至りぬ。折から到來の品とて、鯛一尾を家來の持ち出で、披露したるに、如水指圖して、三枚におろし、骨をば料理して、客人にすゝめよ。といふ。備中さてく、客齋なることかなと、心に卑しみけり。やがてかの五十兩を取り出して返したるに、如水更に受け取らずしていふやう、この金は、はじめより足下に進上せしつもりにて、返さ

れんとて貸したるにあらず。御用に立ちしは金銀の徳。そのためにとて、日頃は貯へしなり。御身の事足りて、われも満足なり。とて、手にだに觸れざりきといふ。これによりて、節儉と吝嗇との別を知るべし。

三六、雛祭の記

高濱 虚子

我が幼兒は去年の三月に生れたり。今年は初雛なれば、せめて内裏雛のみにても購ひくれよ。一度購ひ置けば、此の兒の一生あるものなれば。など、母なる人の切に望むに、やがて内裏雛と五人囃子といふもの

内裏雛

五人囃子

譬へんやうなし

ゆくりなく

忍ばしく

はふこ様

ぞ、我が兒の持物とはなりける。幼兒よりも母なる者の喜譬へんやうなし。
奥の間の三尺の床に、本箱を横へ、机の抽斗を重ね、三重ばかりの壇をしつらひて、例の内裏雛と五人囃子とを竝べ祭るに、淋しげながらも目美しく、我はゆくりなくも、我が亡き親のこと慕はしく忍ばしくなりぬ。

膳枕などの箱と共に、棚の上に竝べられたる一つの箱には、鼻の缺けたる紙雛、手足の無きはふこ様、去年のお煎りの紙に包まれたる、小さき箆笥の壊れた

節供

るを觀世捻にて括りたるなど、我はこれを雛様箱と呼びて、三月の節供が來れば、其の箱を直に臺として、其の上に祭りて樂しみしが、隣の家の美しきを見て歸りては、餘りに淋しく汚きに慊らず、母上に訴ふれば、男の子のするものにあらずと叱られて、我に女の兄弟無きことの情なく、果は我の女にあらぬことをさへ情なく覺えて、厚紙に金紙貼りつけ、之を雛の屏風なりとして、僅に自ら慰めたる事など、今の如くに思ひ出でぬ。

かゝる時に、さる人の妹君より、髹人形を幼き者に

菱餅

三尺の盛

と送りこされたれば、五人囃子ばかりの淋しげなりしものも俄に引き立ちて見え、そを内裏雛のいづれの側に置くべきかなど、三十近き男の詮議もをかし。其の日の暮、箆、箆、長持、兩掛より鏡臺、茶箆、箆、金盃、雪洞など、何れも美しく新に壇を飾ることゝなりたり。桃の花も生けられたり。菱餅もお煎りも、白酒も供へられたり。やがて小さき雪洞に灯點すに、雛の顔さへ光を増して、桃の花も俄に咲き競ふかと覺え、五人囃子の鼓の音も、今か響き出づらんと樂し。幼き者の喜母なる人の喜、さては髹男の我が喜、春色俄に三尺の

廬に充ち満ちたるが如し。

唯手足の無き古びたるはふこ様を、此處に竝べ見ぬことの物足らぬやう覺えしは、如何なる故にかあるらん。

ふるさとの雛戀しき都かな (寒玉集)

三七、住居の清潔

家屋・庭園の常に清潔を保つべきは固より、室内の器具・調度等はよく整頓して、決して取り亂す様のことあるべからず。

調度

塵埃

掃き掃除、取片付と一口に言へど、帚の使ひ様、雑巾のかけ様、一具一物の取扱といへども、おろそかにすべからず。

縁側の隅簞箆の後などに、塵埃のたまれる、家の裏物の蔭などに、不潔なるものを掃き寄せたる、又は天井・軒先などに蜘蛛の巣のかゝれる、庭前に布切れ・紙屑等の落ち散れる、襖・障子に子供の樂書し、或は破れ汚れたる、食事せるまゝ、器物の長く取り片付けざる等、いづれも見るだに心地悪しきものなり。これに反して、玄關などのよく拭ひ光れる、土間に履物のきま

見るだに

奥床し

りよく取揃へたる、煙草盆の美しく掃除せる、机の上に書物・硯箱など正しく置かれたる、子供達の定めたる部屋に遊び居て、此處かしこと馳せ廻らざる、床の花瓶に折々のもの醜からず挿したる、廁の水・手拭の清らかなる等、何れも奥床しくて、心掛のほどもうれしきものなり。

配置

すべて、庭園の造り方・構への仕様・住居の間取には、各一定の目的ありて、使用向きも同じからぬものなり。されば、掃除・取片付は勿論器具の配置・調度の備付、その他の裝飾・手入に至るまで、注意を忘れず、萬事よ

くこれに相應して、内外共に秩序整然たらしむべきやう心掛くべし。(天正女子讀本)

三八 行儀作法

徳富猪一郎

不恰好
沐猴にして冠す

諺に「馬子にも衣裳」といへり。併し、いかに立派なる衣裳を著けたりとて、もし、その人にして賤しからんには、却つて不恰好となるべし。世の中の人々、たゞ綺麗に著飾れば、人は上品となると思ふは、大いなる心得違ぞかし。かゝる類を「沐猴にして冠す」とこそはいふなれ。

余はこれに就いて、行儀作法の大切なことを見る。行儀作法とは、人々の日常の舉動の上に現る、總ての仕打をいふ。家庭に在る時も、朋友と交る時も、公の場所に臨む時も、詳にいへば、箸の上げおろし、天氣の挨拶、茶を飲むにも、世間話をするにも、行儀作法は包むことも隠すことも出来ぬものなり。如何に立派なる衣服を著けたりとも、下品なる行儀作法を打ち消すことは出来ぬものなり。

のたまふ
孔子は、性相近し、習相遠しとのたまへり。そは、人は習によりて如何やうにもなることを云はれたるも

小笠原流

恭敬

封建時代

のなり。氏より育ちといふも、これと同様の意ならん。されば、世の親たる人は、その子供の教育に就きても、よく、行儀作法を教ふること大切なり。行儀作法とて、必ずしも人に辭儀をなすのみには限らじ。小笠原流にしかつめらしくするのみに限らじ。たゞ恭敬なる心をば恭敬なる仕打に現すまでの事なり。詞づかひといひ、様子といひ、何となくおとなしく上品に、自然にして作りかざりなき裡にも、自ら筋合正しきをいふなり。

わが邦、封建時代には、如何に行儀作法の正しかり

容貌

長者

虚飾

淑女

しよ。例へば口論をなすにも、殊更に膝を直うし、容貌を正しうし、言葉靜に論じたるなり。況や長者に對する幼者の作法の如きも、又上下の差別の如きも、如何に嚴重なりしよ。余は今日の社會にかくあれと註文するにあらず。何となれば、封建時代に於ては餘りに行儀作法のみ心がけ、その弊や虚飾に流れたることなきにあらずればなり。併し、近來社會の有様を見れば、立派なる紳士淑女といはるゝ人にして、却つて僕婢すらも愧づる振舞をなして、別に怪しともせぬ風なきにあらず。如何にも歎かはしき次第なり。

維新以來風俗の破れたるもの大なれども、行儀作法の壞れたる程甚しきものはなし。今やわが國は世界各國と交際をなす時節に於て、從來君子國とか禮儀國とか賞讃せられたる國柄にも似ず、不行儀、不作法、恬として顧みざるは、いかにも心苦しき次第ならずや。

されど、行儀作法を、唯、外形の修飾と思ふは大いなる誤なり。儀容周旋いかに禮節に中るとも、若しその心賤しければ、自ら外に現るゝものぞかし。されば行儀作法の要は、先づその心を正しうするより先なる

儀容周旋

主婦

はなし。次には上品なる人を手本として、よくその舉動に氣をつけ、知らず覺えず、その風に化せらるるやうありたし。若しそれ立派なる衣服を著くるが如きは、時と場合とによる。必ずしも是非かくせよといふ程のことにあらず、一家の主婦はその子供の手本ともなるべき人なれば、別してその行儀作法にも注意ありたきものなり。

日本女學讀本 卷二終

日本女學讀本全八册

定價	卷一より各金參拾九錢
卷四より各金參拾參錢	
卷五より各金參拾參錢	
卷八まで	

大正八年十月二十五日印刷
大正八年十月三十日發行

編者兼
發行者

帝國婦人協會

代表者

東京府豊多摩郡澁谷町下澁谷參百九拾壹番地

井

出

豐

作

印刷者

東京市神田區三崎町三丁目一番地
楢山定吉

印刷所

友

文

社

不許複製

發賣所

東京市神田區錦町一丁目
振替口座東京四九九一番

株式會社

明治書院

電話神田二三九八番

